第十回企画展

発掘された山形の城館跡

二〇〇一年十月二日～十二月三十日

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

はじめに

山形県には、1400あまりの城館跡があまねく分布しています。各市町村において、城や館の跡がないところはありません。時代も平安時代から江戸時代に及びます。それらの城館跡のうち、開発などによる土木工事にともなって消え去っていったものもあります。県内でこれまで発掘調査が行われた城館跡は約50ヶ所ぐらいあります。そのなかには、少数ながら史跡整備などにともなう学術調査がふくまれています。

城館は、武士が権力を握っていた中世から近世にかけて、軍事的な防御施設として主に造られたものです。しかしそれは、地域の政治の拠点であり、文化の中心でもありました。したがって交易や宗教・生活の様相など、在地構造を解明するためにも大変重要な遺跡として位置づけられます。文献のとぼしい地域の歴史を調べるためには、城館跡の存在を無視することができません。

これまでの発掘調査によって出土した遺物はぼう大な量にのぼり、また城館の構造を明らかにする多くの情報がもたらされております。これらの主要な成果を展示して、新しい視点で地域の中世の歴史や戦国時代のすがたについて考え、豊かな歴史像をえがいていただくことをねらいとして第10回企画展「発掘された山形の城館跡」を開催することに致しました。そして同時に「考古学セミナー」「講演会とシンポジウム」など関連する事業も企画しました。

企画展にあたっては、山形県埋蔵文化財センターをはじめ、山形市・米沢市・鶴岡市などの教育委員会、川西町島津重雄・平田町石黒義男氏、上山市立中山小学校からは貴重な資料を拝借いたしました。また山形大学伊藤清郎先生からは玉稿を賜り、また多くの方々より指導・助言をいただきました。心からの御礼を申し上げます。

2001年10月1日

山形県うきたむ風土記の丘考古資料館

館長　　川崎　　利夫

■目次■

1.堀がめぐるもののふの館――――――― 1

2.城とたたかい――――――――――――― 12
(1)山城の構造――――――――――――― 12
(2)二つのタイプの山城――――――――― 13
(3)発掘された中世の山城――――――――― 18
◇コラム　城と合戦をみつめる目――――― 24

3.城館と人々のくらし――――――――――― 25

《資料》
◇山形県内の主要城館跡分布図――――― 34
◇山形県城館研究文献目録――――――― 37

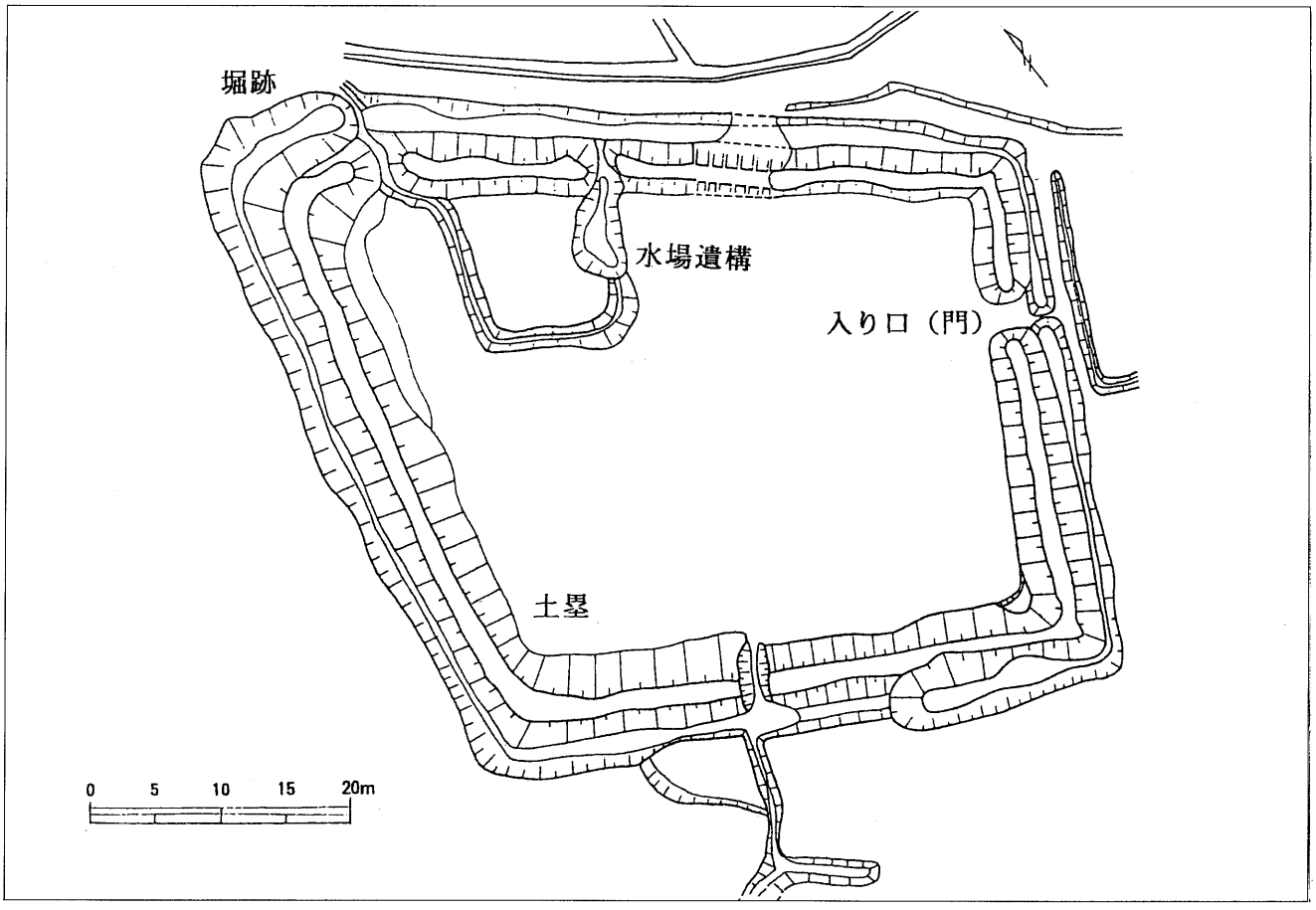
《解説》
山形県内における中世城館跡　　伊藤　清郎 ― 42

1. 堀がめぐるもののふの館

防御施設として堀などをめぐらした遺跡は、戦争が始まった弥生時代からあった。佐賀県吉野ヶ里遺跡や横浜市大塚遺跡などがよく知られている。環濠や土塁は古墳時代の豪族の居館にもみられ、律令時代に入って7世紀には国際的な緊張関係から、西日本に朝鮮式山城・神籠石（こうごいし）などが現れる。さらに東北地方には、蝦夷に対して城柵が設けられる。また東北北辺の青森・秋田・岩手などの地域には、巨大な壕をめぐらした高地性集落が10～11世紀に出現する。12世紀には東北の王者藤原氏の居館である「平泉館」（柳の御所跡）などが注目されている。

中世の幕開けは、草深い地方から始まった。時代を担う武士階級の登場である。田舎に住む武士たちは、それぞれの地に館をかまえて土着した。それが「中世居館」「方形居館」と呼ばれる遺跡で、軍事的な防御と居住施設を兼ね備えていた。これらの方形館の様子は、鎌倉時代後半に成立したとみられる「法然上人絵伝」などの絵巻物にも具体的にえがかれてその様子をうかがうことができる。

米沢市の北東に位置する木和田館は、1986年米沢市教育委員会と市史編纂室によってその一部が調査された。遺跡は背後に山を背負い、前面に水田や集落を望む微高地にあり、58×48メートルの規模の不整方形の範囲を堀と土塁で区画したもので、東側に門を開く。門を入って30メートルのところに石組みによる水場遺構が発見された。まわりは内側の土塁をきって流れを導き、水場をまわって排水するしくみとなっている。注目すべきは、この遺構のまわりから、40点の須恵器や土器の小破片、砥石などが発見されたことである。（第１・２図）



第1図　米沢市木和田館平面図（米沢市教育委員会）

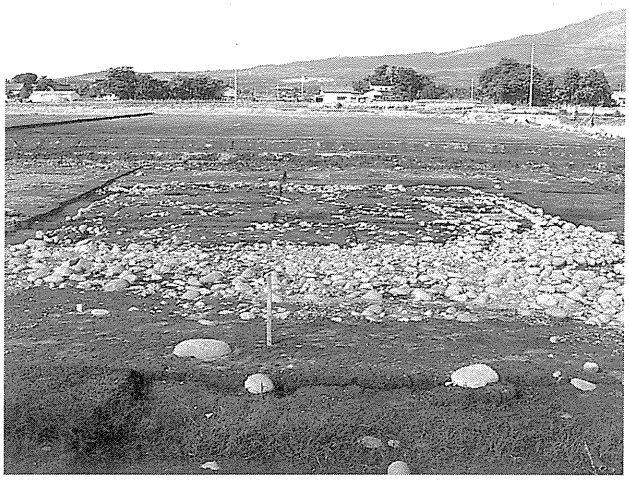
なかに初期の珠洲焼系中世須恵器があり、11世紀後半から12世紀前半の年代と推定される。この方形館跡の機能していた年代を示す資料である。水場は、池というより農具や馬蹄を洗う洗い場である。名主や富豪層から成長した初期武士層の居館跡として重要な遺跡であるが、まだ全面にわたる発掘調査は行われていない。

同じような方形館跡は、庄内の秋田県境に近い遊佐町大字小原田の大楯遺跡でも発見された。県教育委員会と町教育委員会による4次にわたる調査が行われている。鳥海山の南西麓、月光川の扇状地に位置する。幅3メートルの大溝で区画された内部は角材列が北辺48.4メートル、西辺43.7メートル、東辺38メートル、南辺54メートルにわたってめぐるが、これは板塀か柵であった。内部からは、礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基が検出されている。遺物は珠洲焼陶器、かわらけ、瀬戸・越前・常滑焼などの陶器片のほかに、溝中より「保元」の墨書がうかがわれる木札、年輪年代測定により、1192年の伐採年代を示す「折敷（おしき）」などが発見された。この居館跡の周辺からも多くの堀立柱建物跡が発掘されている。　（第３～７図）

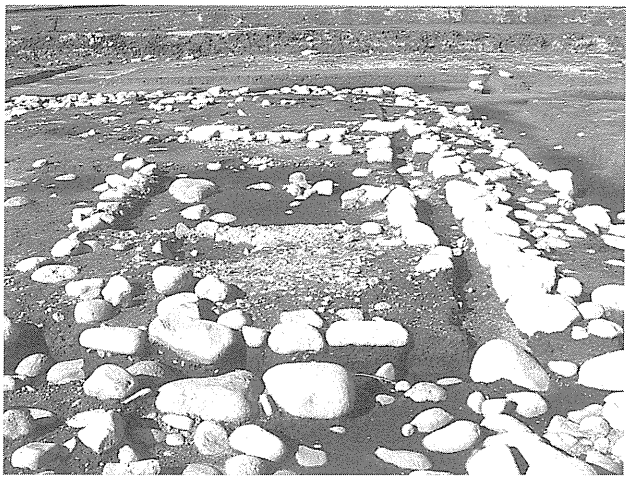
この辺り一帯は、平安時代後期藤原頼長の荘園であった「遊佐庄」域に属する。おそらく後に地頭に補任されるような有力者の居館跡であったとおもわれる。出土遺物からこの遺跡の年代は、12世紀から13世紀にかけてが中心になるという。

（表面）　　（内面）

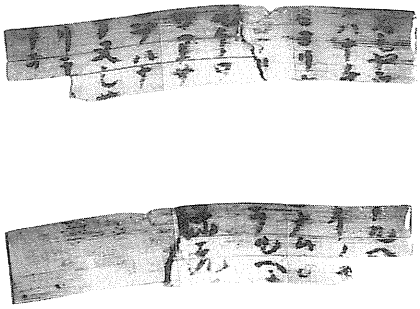
第2図　木和田館跡出土の須恵器・土師器（米沢市教育委員会）



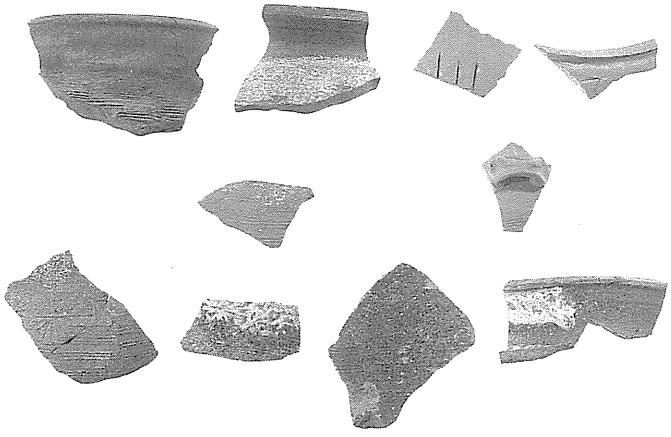
第3図　遊佐町大楯遺跡全景



第4図　大楯遺跡内部の建物跡

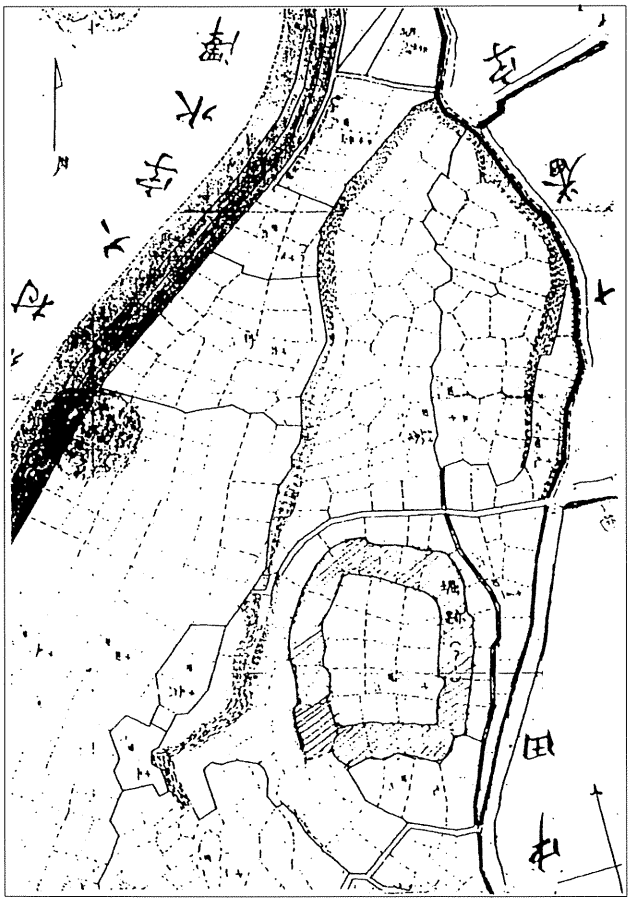


第5図　「保元」の墨書ある木札

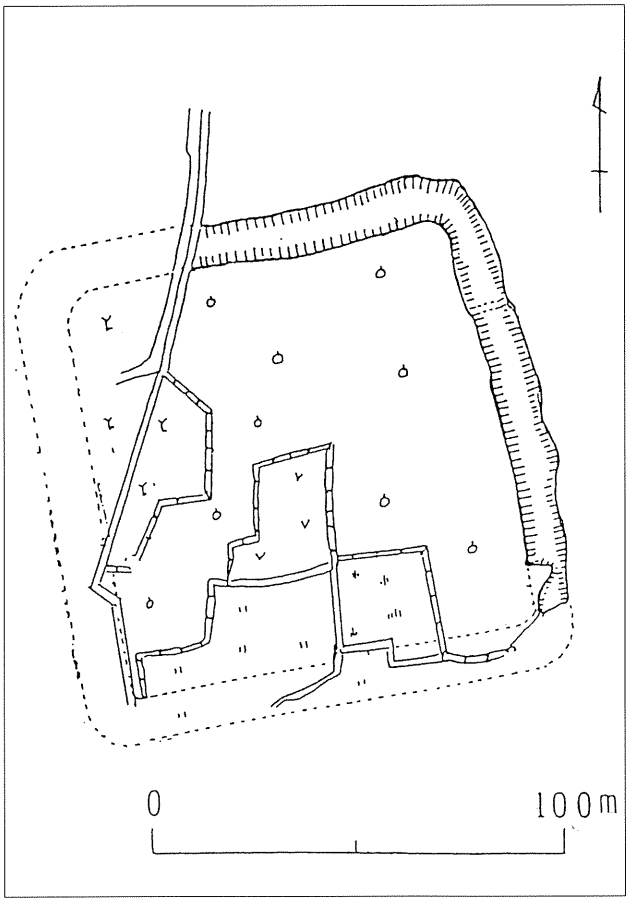


第6図　珠洲焼系陶器

第7図　大楯遺跡主要部平面図（遊佐町教育委員会「大楯遺跡第3・4次発掘調査報告書」による）

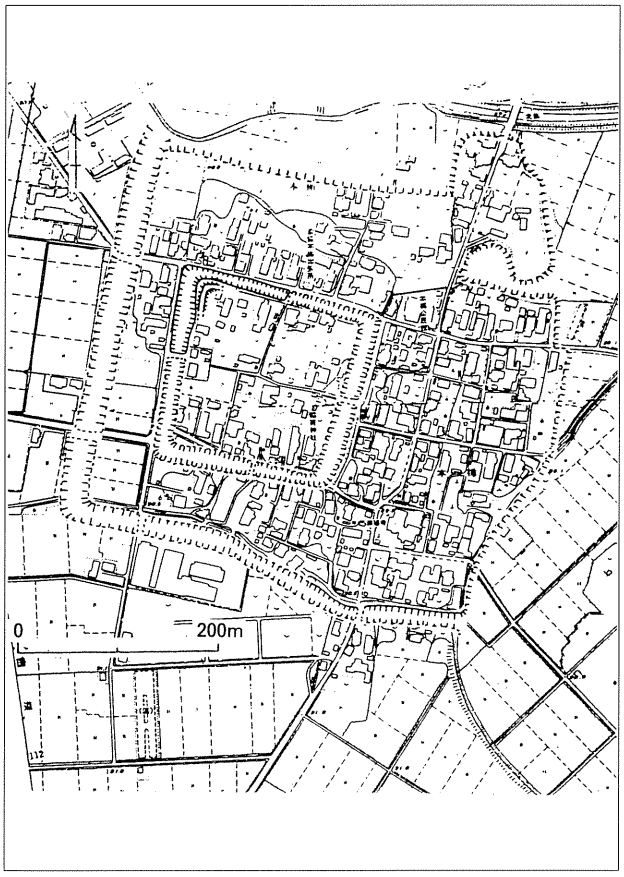


第8図　鶴岡市田川館跡の復原図（秋保良氏による）

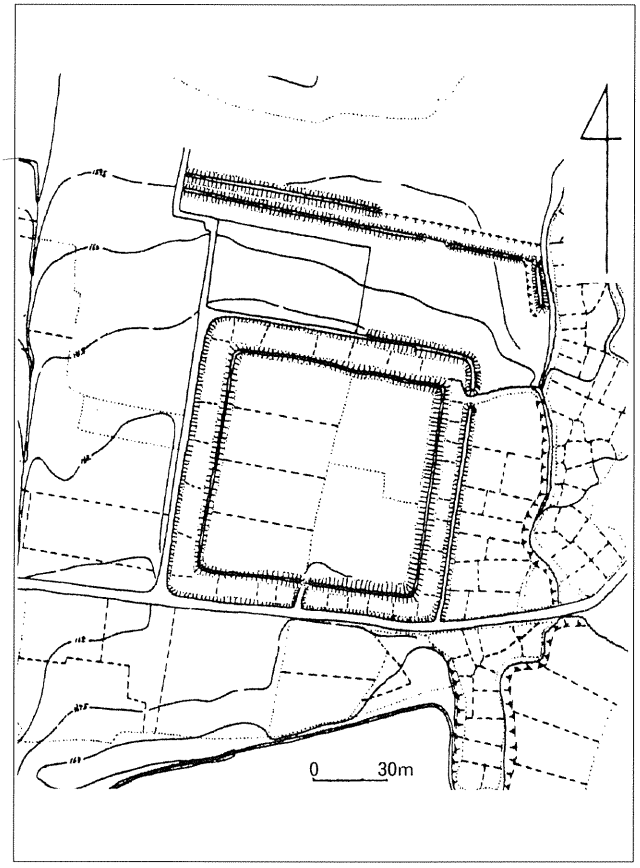


第9図　天童市二階堂遺跡の堀跡

第10図　天童市二階堂遺跡



第11図　寒河江市本楯跡



第12図　尾花沢市兵沢遺跡

鶴岡市の南にある大字田川は、「吾妻鏡」文治5年の記載による平泉藤原氏の配下の田川太郎行文の居館があった地といわれ、その墳墓群や蓮花寺廃寺跡なども残っている。田川氏の居館は、田川小学校のあたりといわれてきた。学校が建てられる以前の明治初年の地籍図によって一辺50メートルほどの堀がめぐる方形居館であることが確かめられ、さらにその周囲に土塁があったこともわかった。（第８図）

鎌倉幕府が成立し、武家の権力の確立にともない、公領や荘園に地頭が配置されるが、それにともない鎌倉御家人やその一族・郎党など鎌倉武士の移住が行われる。大泉庄には武藤氏、寒河江庄には大江氏、成生庄には二階堂氏、大曽根庄には安達氏、長井庄には大江氏などである。これら地頭クラスの居館はおおむね規模が大きい。例えば天童市大清水の「二階堂遺跡」は120メートルの方形館で、（第10図）寒河江大江氏の初期の本拠とみられる寒河江市本楯は、200メートル四方を堀で区画する居館跡である。（第11図）

これらの方形館跡は、失われたものも少なくないが、一部でもまだその跡をとどめているものは多い。置賜地域では、平地部に少なくとも300余り分布が確認されている。米沢市・川西町・南陽市・高畠町・長井市・飯豊町などの平野部には、その内部に仏堂や板碑が立ち、塀や土塁をめぐらした居館跡が残り、中世の景観をほうふつさせる風景に出会うことがある。

川西町吉田の「大坊屋敷」は、現在、個人の屋敷地となっているが、周囲に半町程度の堀をめぐらした跡をうかがうことができる。屋敷内には阿弥陀堂もあるが、1960年に内堀の近くから2個の古瀬戸瓶子が発見された。なかなかの優品で、現在は県指定有形文化財となっている。（第13図）これは13世紀後半の年代が推定されるが、これと類似の古瀬戸瓶子が、最近米沢市長手の長手館跡の近くの古墳から発見された。古墳は7世紀に築かれたものであるが、付近より板碑なども出土しているところをみると中世に墳墓として再利用していることがわかる。（第16図）

最近、道路や宅地造成にともなって発掘調査された方形居館跡に、南陽市宮崎植木場1遺跡・米沢市塩井町荒川2遺跡（県埋蔵文化財センター）、米沢市万世我妻館跡・米沢市竹井東屋敷館跡（米沢市教育委員会）などがある。荒川2では、南館、北館の2つの館跡があり、南館から北館へ移るものと考えられ、14世紀には南館、15～6世紀にはその中心が北館に移行したものと思われる。かわらけ・内耳土鍋・瀬戸・美濃・白磁や青磁などの輸入磁器から米沢市戸長里産の陶器片・漆器椀・曲げ物などの木器・石臼・茶臼・古銭・小柄・こうがいなどが出土している。

我妻館跡は、71×78メートルの方形プランで、土塁と水堀により区画され、内部が溝により3つに更に分けられる。遺物は少なかったが、内耳土鍋なども出土しており、15世紀前半から16世紀後半まで機能していた方形館と考えられ、堂森山館の根小屋とも推定される。（第19図）

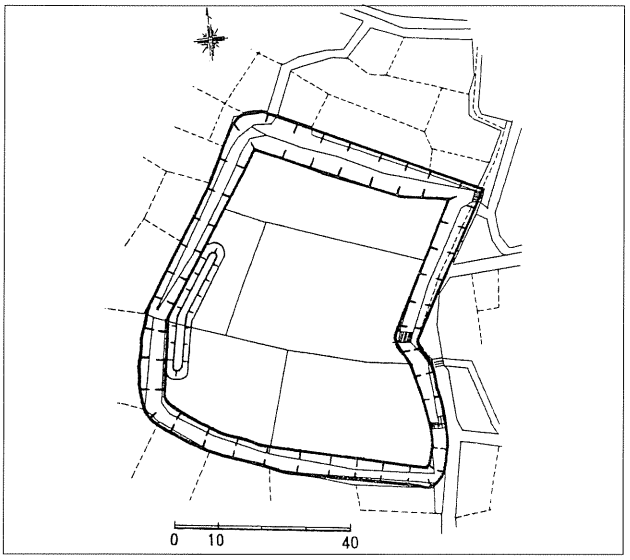
東屋敷館跡は、半町程度の方形館で5～6棟の堀立柱による建物跡があり、15世紀から16世紀後半の時期に営まれたと考えられ、伊達家重臣茂庭氏に関連する居館跡と推測される。（第20図）

おそらく山城と居館跡、つまり緊急の際の防御施設である「詰めの城」と日常の生活の場である「根小屋」とのセット関係が成立するのは、戦国期に入る15世紀後半以降とみられる。その時期の居館跡も基本的に方形館であった。

村山地域における最上氏関連の平地における方形館跡は、規模はほとんど1町四方を超え、東根市長瀞本楯のように2町規模のものもある。15世紀代に営まれたとみられる天童市成生館・蔵増城・高擶城・寺津城などは、規模の大きい回字状の輪郭式の縄張りであるが、当時は単郭式の方形プランであったものが、次第に範囲を拡大し、いわゆる二の丸三の丸や張り出しの出丸、虎口の桝形などがもうけられるようになる。（第17図）

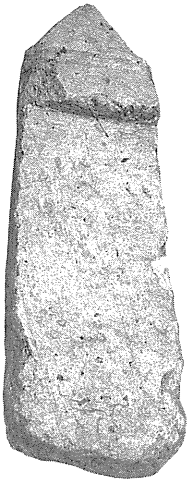
方形館跡は、武士が発生する中世初期から16世紀の中世終焉の時期まで、規模を拡大したり、複雑化したりしながらたえず再生産されてきたのである。

第13図　川西町吉田　大坊屋敷内出土の古瀬戸瓶子（13世紀後半・県指定有形文化財）高37.3cm

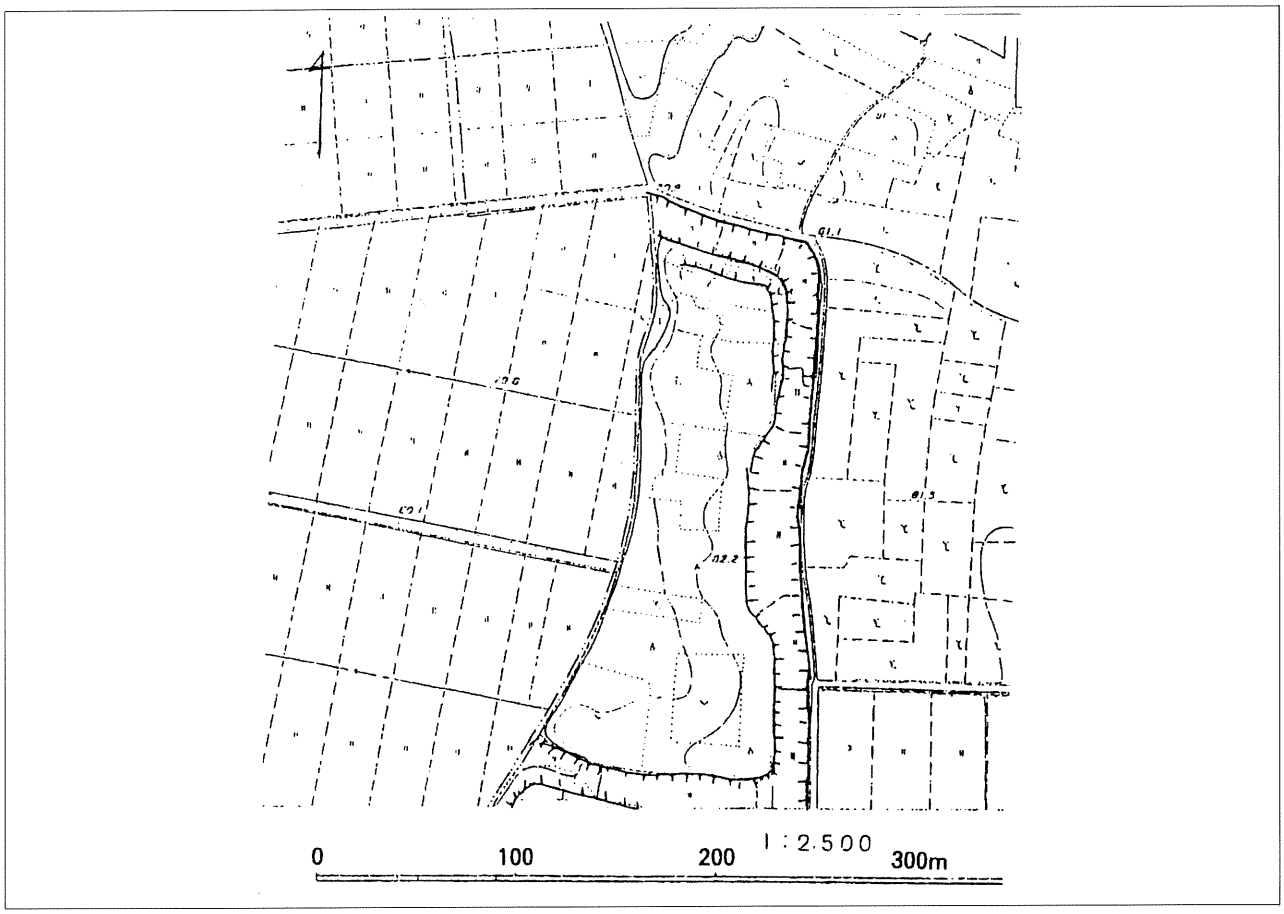


第14図　古瀬戸瓶子が出土した大坊屋敷（川西町）

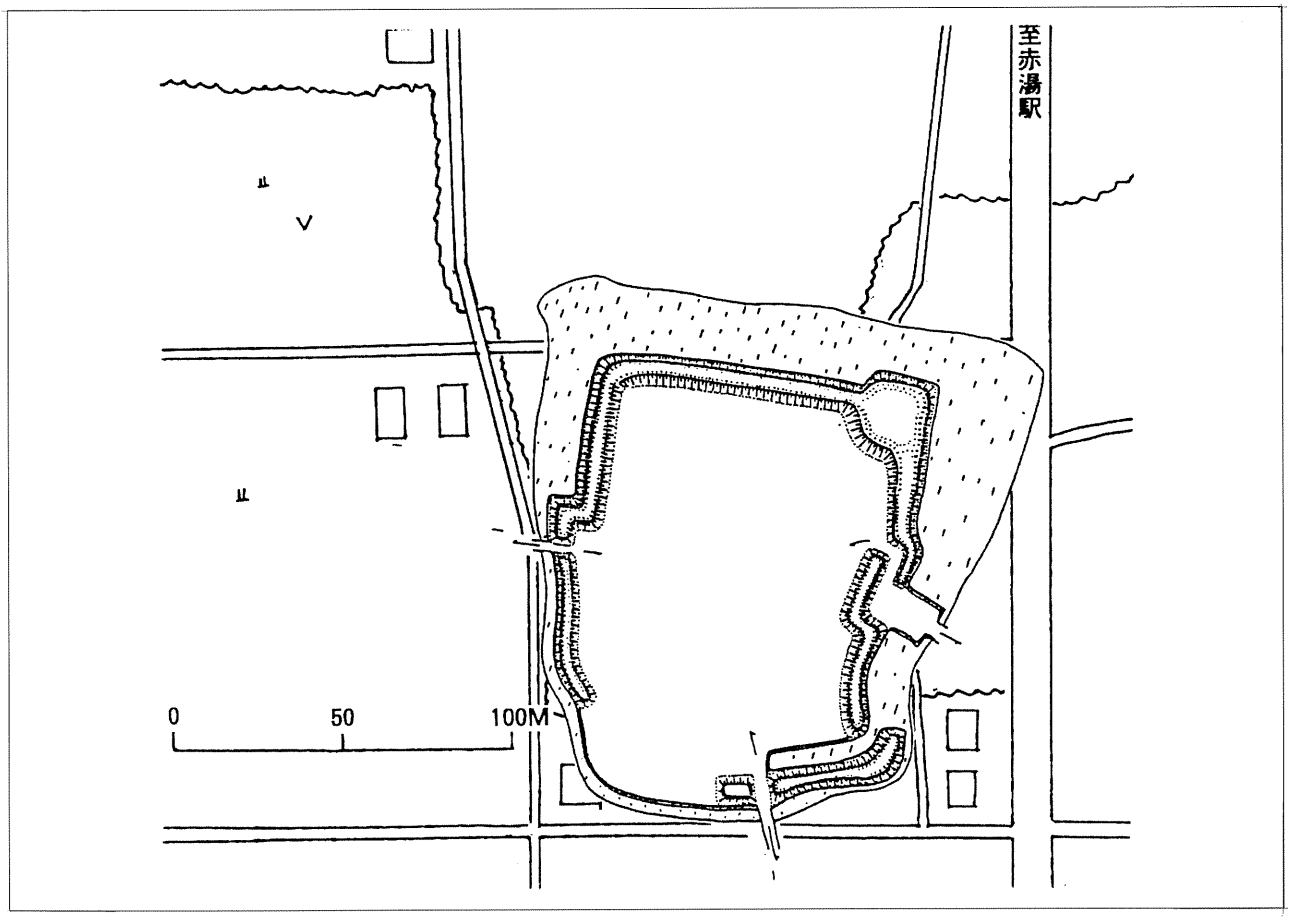
第15図　米沢市長手出土の古瀬戸瓶子（14世紀）高30.4cm



第16図　米沢市長手出土の置賜型板碑　高73cm

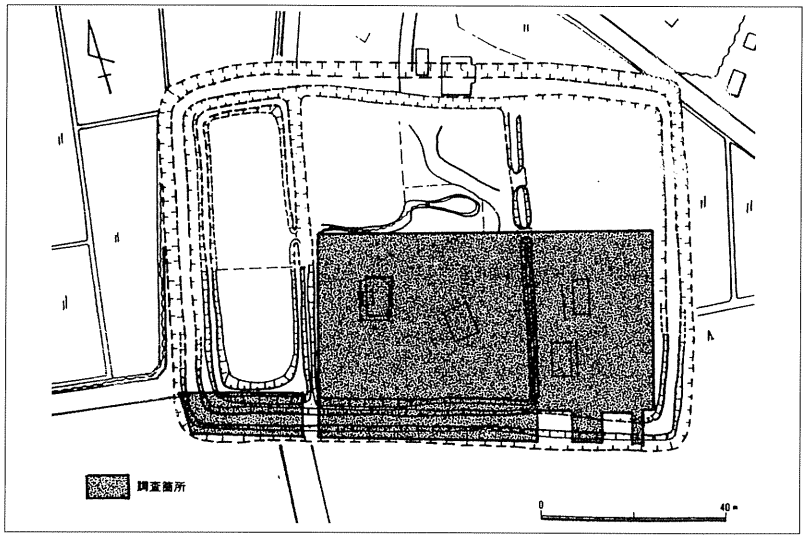


第17図　初期最上氏系の東根市長瀬本楯館跡（15世紀前半）

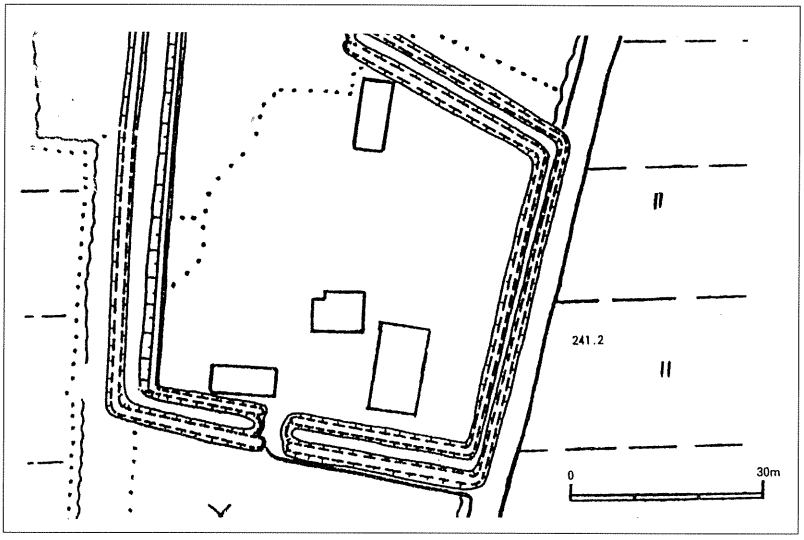


第18図　くい違い虎口がみられる南陽市郡山矢ノ目館跡（16世紀）

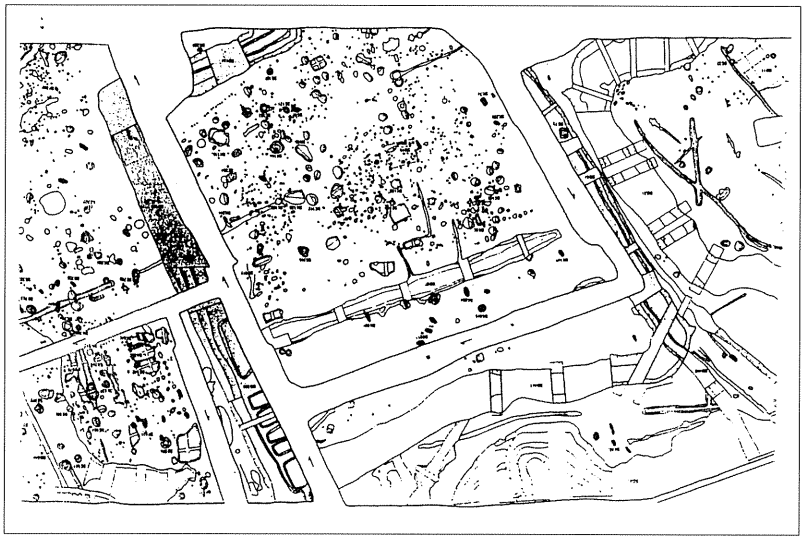
発掘された置賜地域の方形館



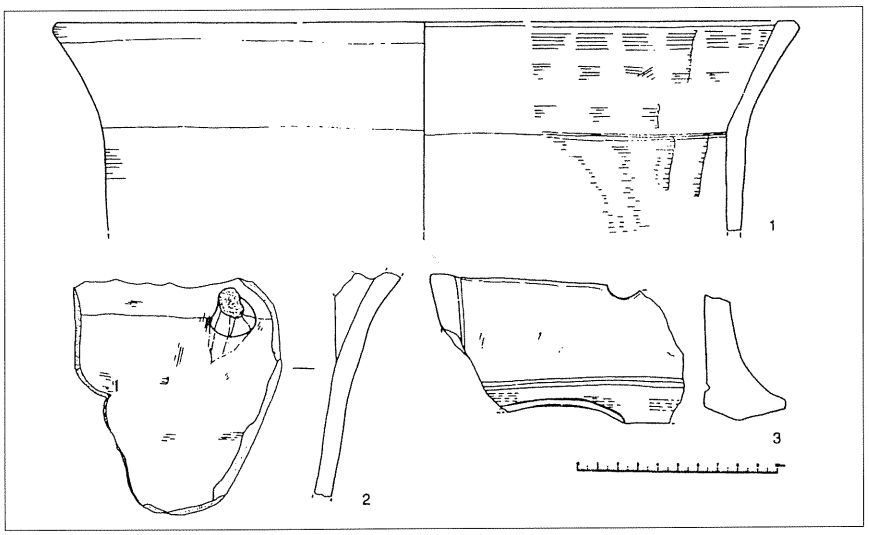
第19図　我妻館跡（米沢市教育委員会）



第20図　東屋敷館跡（米沢市教育委員会）



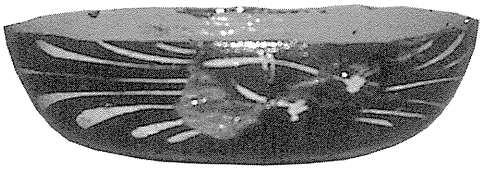
第21図　荒川2遺跡発掘図（山形県埋蔵文化財センター）



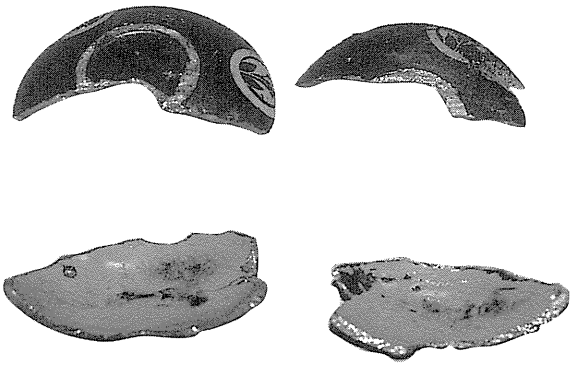
第22図　東屋敷出土の土鍋実測図

この種の内耳付きの土鍋は、いまのところ米沢市などの15～16世紀の集落跡や城館跡から発見されている特徴的な土器である。

第23図　米沢市大浦C遺跡出土の土鍋



（高3.4cm、径10cm）



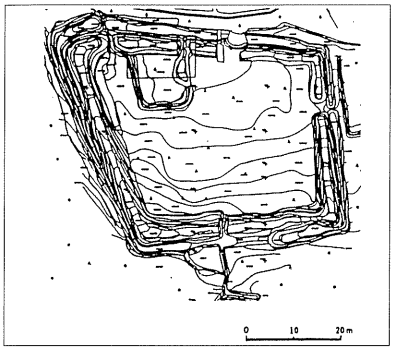
（上表面、下内面　右径10.2cm）

第24図　東屋敷館跡出土の漆器椀

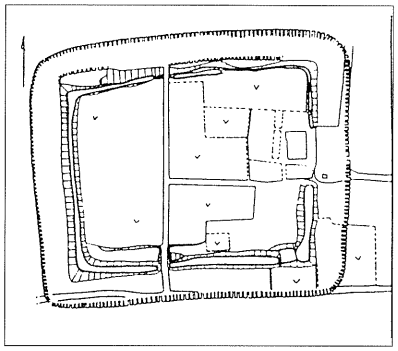
置賜地域における方形居館跡の諸類型（第25図）

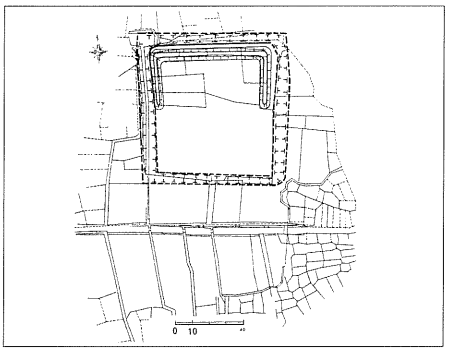
（参考　手塚　孝「東置賜地区の中世城館の分布と特徴」
山形県中世城館遺跡調査報告書　1集1995）

1～3 単郭式の方形館、4・5. 複郭式の方形館、6. 出丸のある方形館
7. 並郭式の方形館　　8. 連郭式の方形館　　9. くい違い虎口をもつ方形館

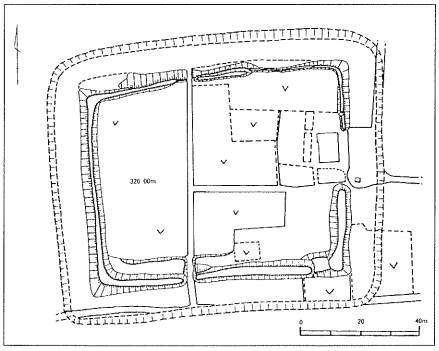


1. 木和田館（米沢市）

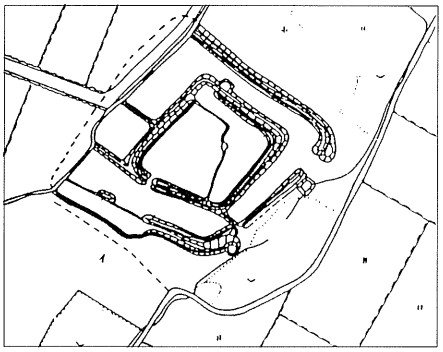

2. 梓山館（米沢市）

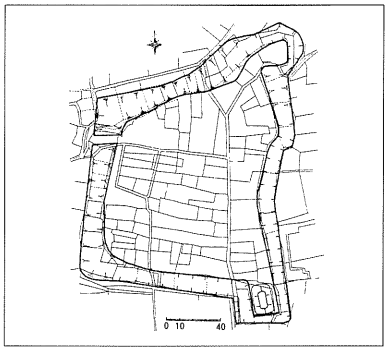


3. 寺嶋館（川西町）

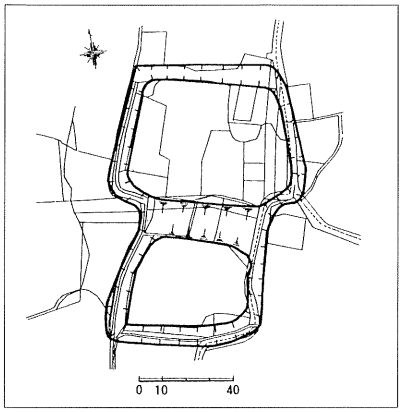


4. 喜多館（米沢市）

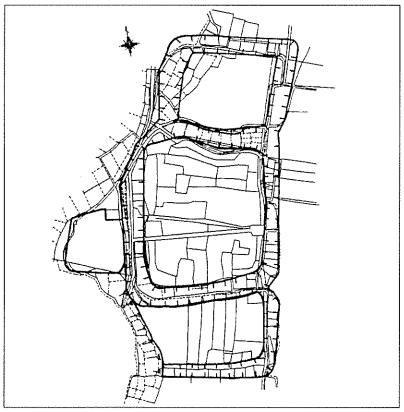

5. 原田館（米沢市）

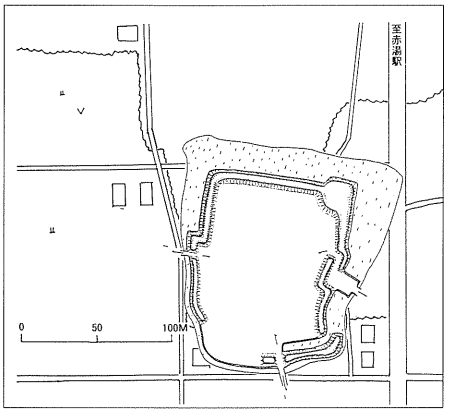


6. 洲島館（川西町）



7. 田中在家（川西町）


8. 小松城（川西町）



9. 矢の目館（南陽市）

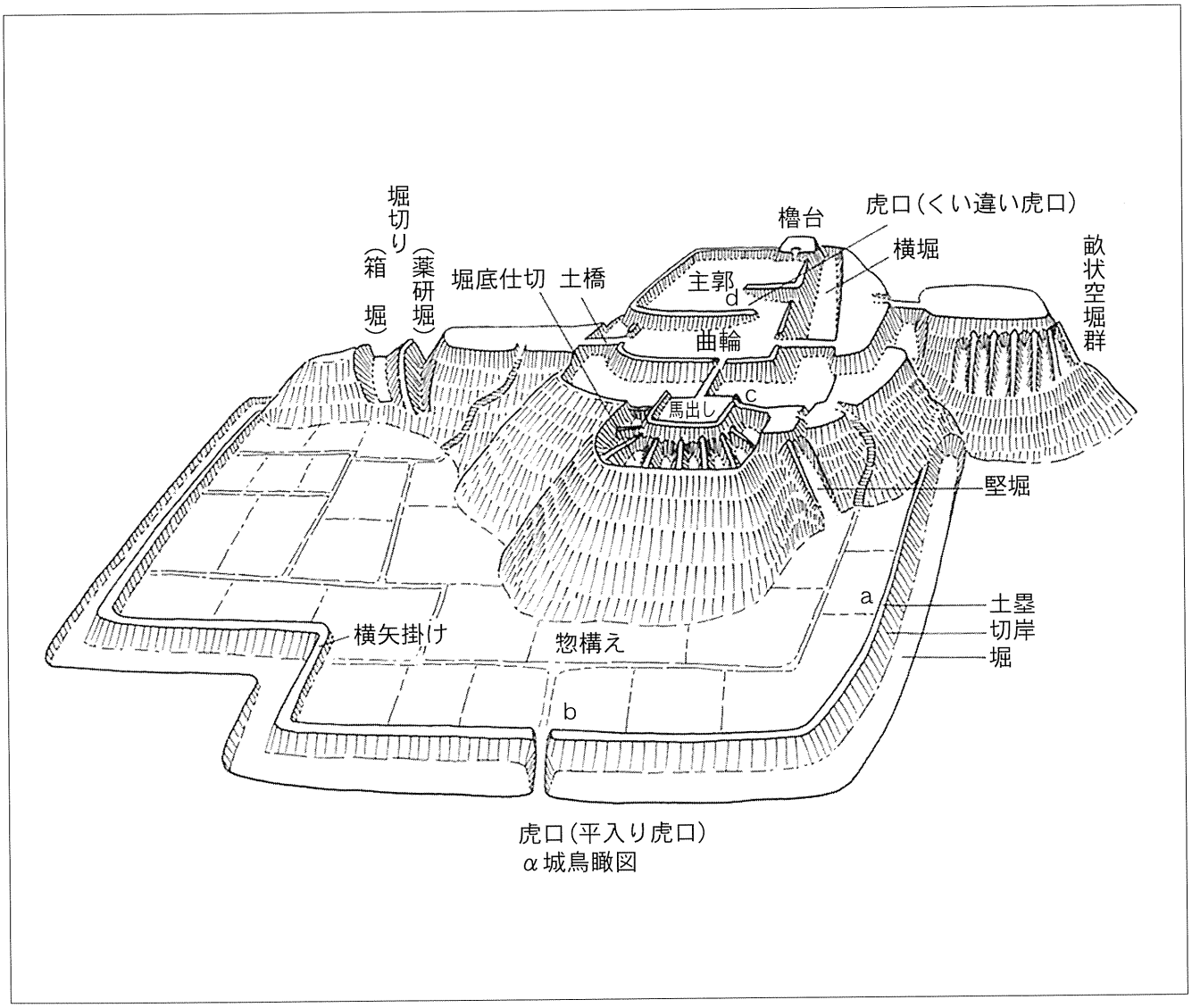
2. 城とたたかい

(1) 城の構造

山岳や丘陵部に城や館が設けられるようになったのは、主として南北朝の内乱の時期からであった。山の一部を削平して曲輪（郭）をつくり、切岸をめぐらした山城が出現する。北畠氏の福島県霊山城、楠氏の赤坂・千早城などが修験勢力と連携した南朝系山城として知られている。

山形県内でも、南朝による藤島城（平城）、立谷沢城、山谷館、河内城、天童古城などが、後の文献にも見えるが、その多くは戦国期などに再利用されているので、その実態は不明な点が多い。

室町期には所領支配の拠点として平城とともに山城も築かれ、地域土豪層も村落の背後の山や丘に城館を築いた。戦国時代に入る15世紀後半から16世紀にかけては、さらに軍事的機能が強まり、規模が拡大され、より堅固な山城へ発展して織豊系城郭へと展開していく。県内にも500余りの山城が分布するものとみられるが、その大半は戦国期から織豊期にかけてのものである。



α城鳥瞰図

第26図　山城遺跡の名称（千田・小島・前川「城館調査ハンドブック」1993　P157より）

まさにこの時期は、日本全土が城館づくり土木工事に熱中していたのである。

城の構造図を「縄張り図」という。「主郭」は緊急の場合城主や指揮者がいて、合戦の指示をしたり、儀式を行う中心となる場である。それをめぐって「曲輪」(郭)が帯状や段状に幾重にも配置される。曲輪は防御のための平坦地である。それに尾根を断ち切る「堀切」や郭をめぐる「横堀」「竪堀」「畝状竪堀」などが設けられ、さらに「土塁」が巡る場合もある。「虎口」とよばれる城の出入り口にもいろいろ工夫がこらされる。

これらの配置や様相は、時期の新旧を示し城館の編年の指標ともなっている。県内の山城は、おおむね平地からの比高50～200メートルのところに位置するものが多いが、標高600～800メートルの高い山岳に存する例もある。城館の規模は、おおむねその性格や機能をあらわす。本城・支城・枝城・端城などの分類もあるが、目的や用途により合戦にあたって臨時につくられる「陣城」「つたえの城」「つななぎの城」などもある。県内でもっとも大きな規模をもつのは天童古城で、南北2.5キロ、東西2キロにわたる。ついで大江氏一族による左沢楯山城などが上げられる。連合勢力によって営まれた戦国期の山城は概して大規模である。

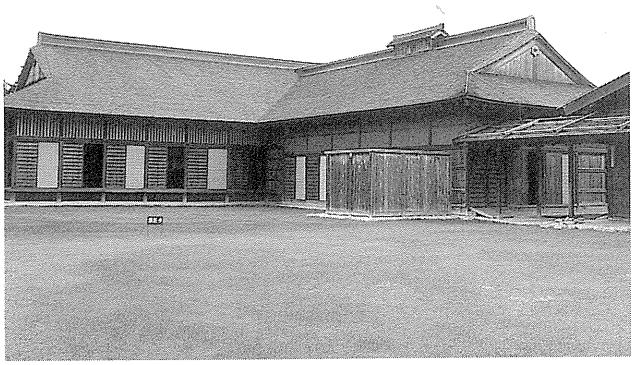
(2) 二つのタイプの山城

慶長5年（1600年）関ヶ原の戦いの際、直江山城守を主将とする上杉勢2万数千を迎え撃つ最上方の拠点が山形市西南の長谷堂城であった。この出羽合戦において、上杉勢の山形侵入を阻んだのが志村伊豆守、坂紀伊守の死守するこの山城であった。（第28図）標高220メートルの山頂部にはやや広い主郭があり、ここまで上がるには山麓部4ヶ所に虎口があるほかは急崖であり入ることができない。すべての虎口は桝形虎口で、幾重にも横矢がかかり、南西部の長谷堂観音の下には横堀がみられる。また北方の斜面には12段にわたって帯曲輪がつらなる。多くの曲輪が主郭を中心に緻密にまた連続的に相互に関連性をもって構築されている。みごとに堅固で統一のとれた縄張りである。このような一極集中による求心性の強い山城と対照的な例が天童古城である。

天童古城（舞鶴山城）は（第29図）その規模においては県下随一である。天童氏の居館である主郭は、標高241.8メートルの山頂にかなり広い平坦地として残されている。その下には帯曲輪や尾根の部分には狭い曲輪が階段状に連なる。この曲輪群は西方へはりだし、現在、将棋塔の立つ中央郭のあたりと堀切によって遮断されるが、堀切はいまは通路となっている。主郭は山頂部に位置するが、そこを中心に八方にのびる支脈にはいずれも独立的な曲輪が8ヶ所ほどにそれぞれに分布している。

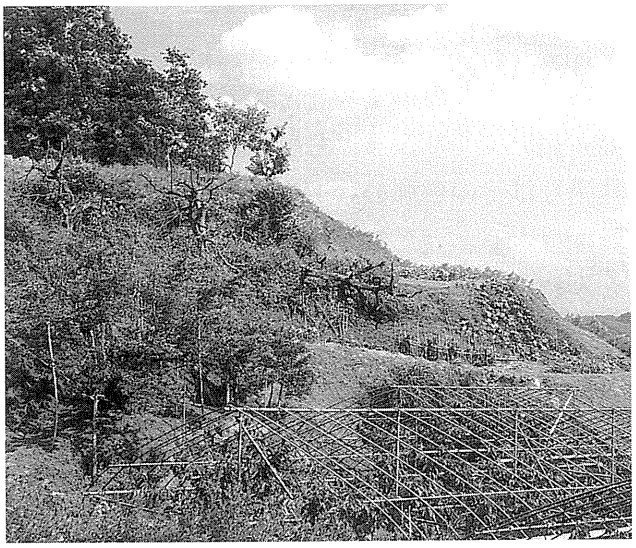
天正12年10月（1584年）、村山地方の覇権をめぐって天童氏やその北部の国人・土豪の反最上勢の連合による最上義光との壮絶な合戦がこの地においてくりひろげられた。天童古城全体の縄張りはその直前の状況を反映している。内部分裂などもあって天童古城は落城するが、全体をみれば規模は大きいものの求心性にとぼしく相互の連関も希薄であったことが読み取れる。それは最上氏と天童氏における軍事組織や家臣団の階層制の差異を反映するものである。

中世城館跡の遺構（第27回）



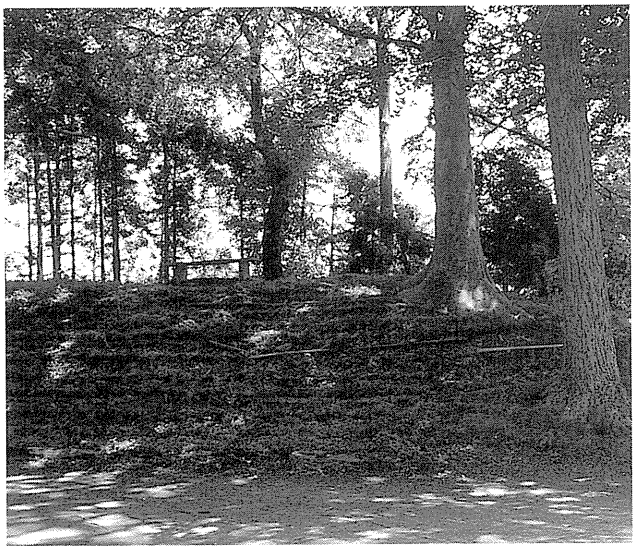
1. 主郭（八戸市根城の復元建物）

2. 主郭をめぐる帯曲輪（立川町楯山城）



3. 段状につらなる曲輪（大江町左沢楯山城）

4. 堀切（高畠町亀岡館）



5. 土塁（藤島町藤島城）

6. 横堀（中山町三島館）

7. 櫓台（上山市中山城）

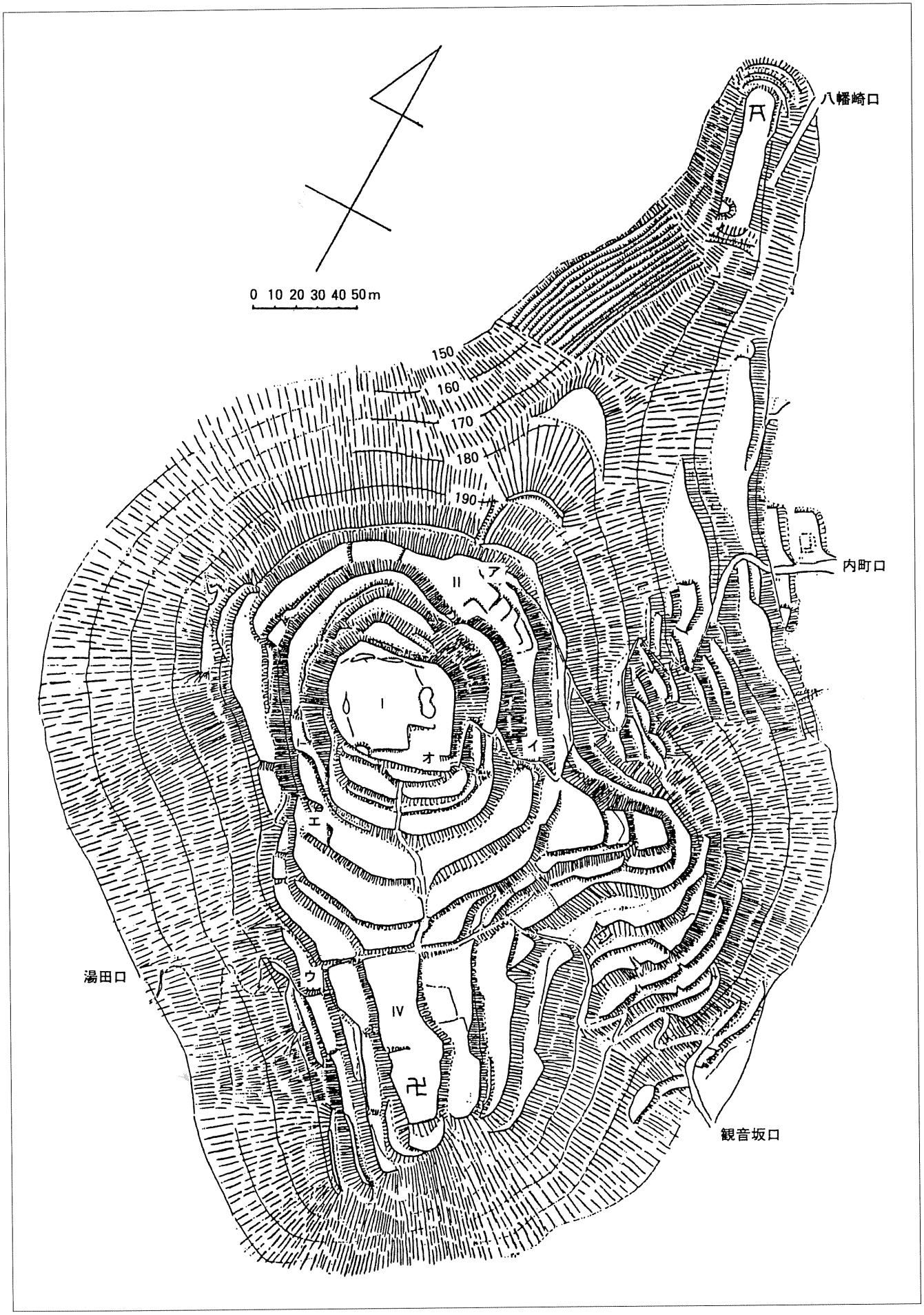
8. 切り岸（高畠町亀岡館）

9. 堅堀（天童市越王山館）

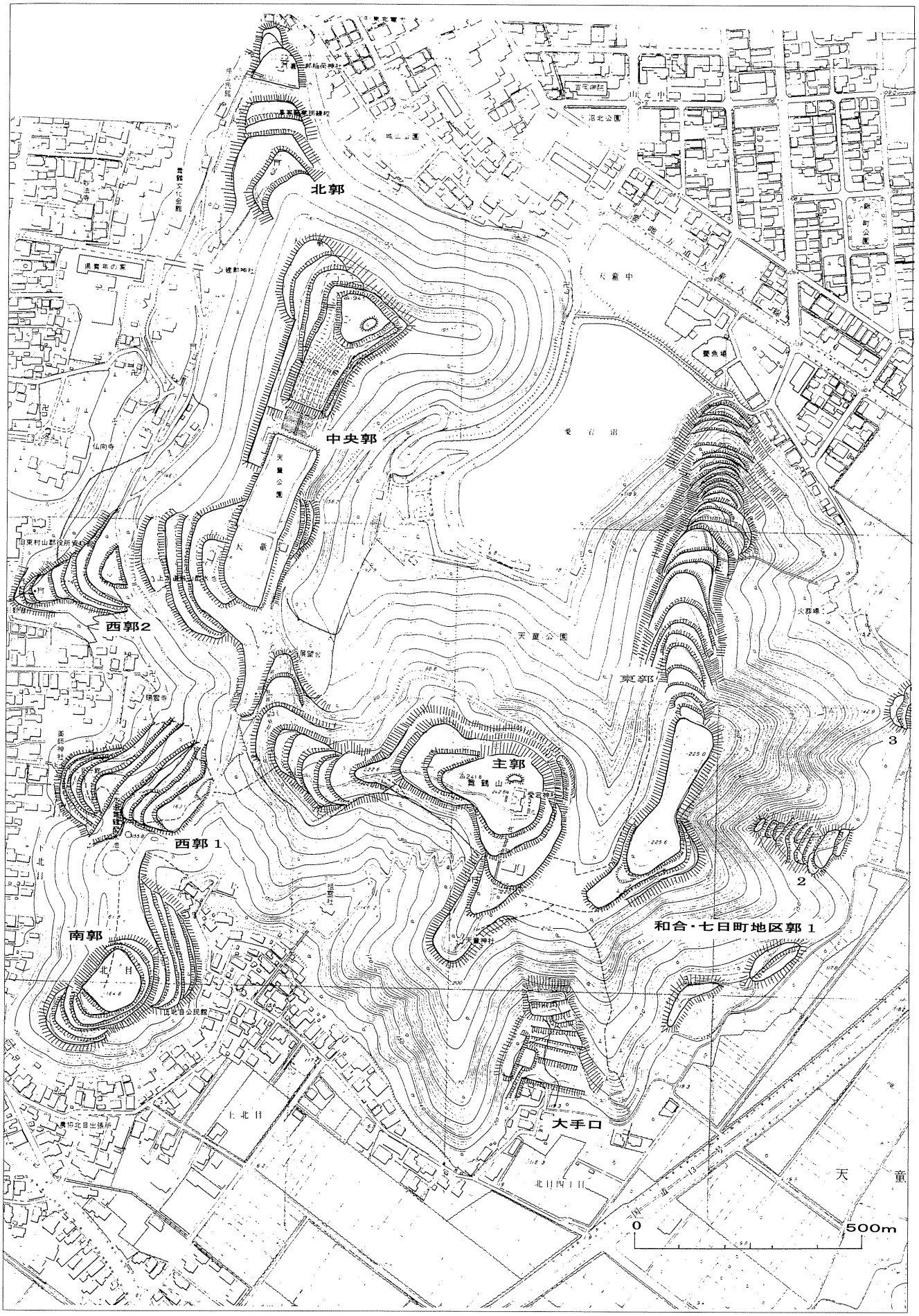
10. 畝状堅堀

11. 桝形虎口（立川町楯山城）

12. 石積みの虎口（高畠町志田館）



第28図　山形市長谷堂城縄張り図（誉田慶信作図）



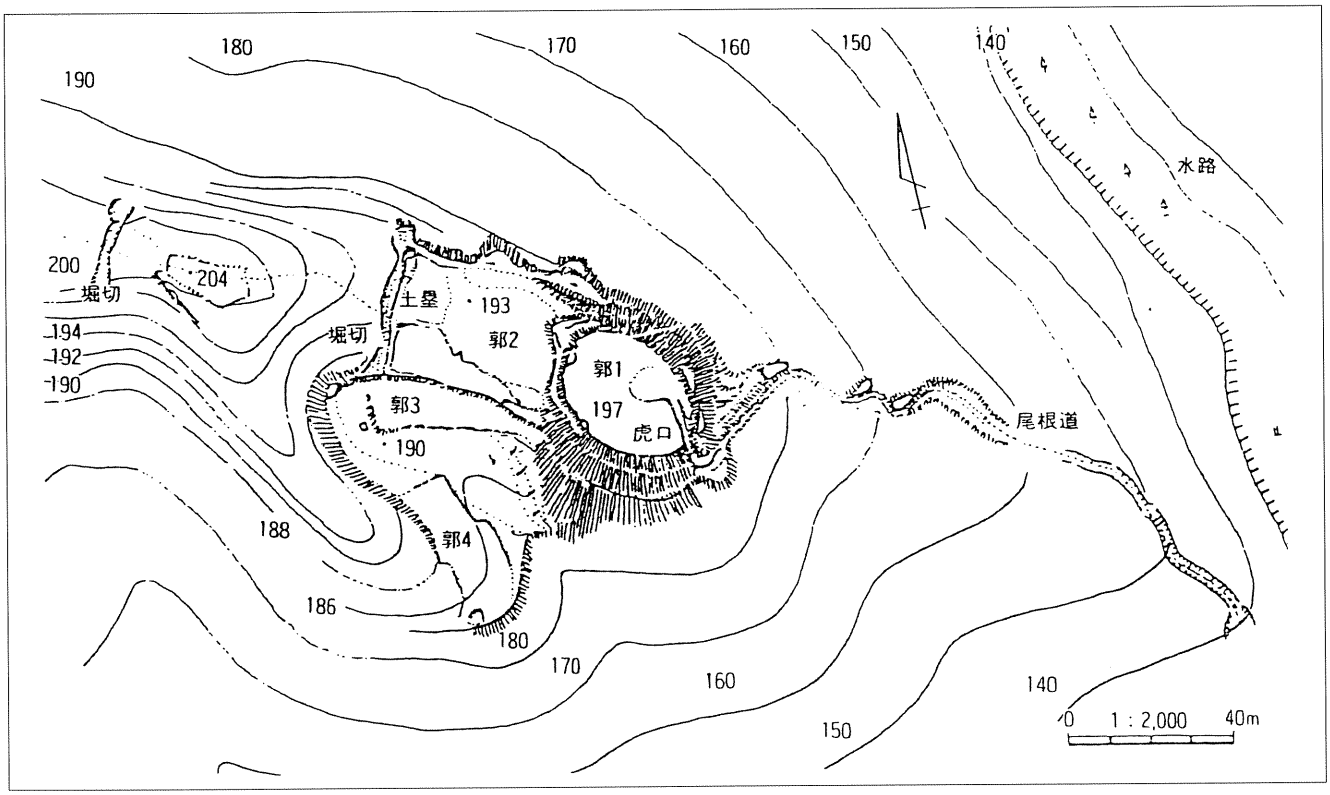
第29図　天童市天童古城縄張り図（川崎利夫作図）

(3) 発掘された中世の山城

これまで県内で発掘された中世の山城は、平山城などを加えると10ヶ所を越える。即ち、長井市白山森館（長井市教委）、村山市本飯田館（村山市教委）、米沢市早坂山B遺跡（県教委）、平田町山楯遺跡(県埋蔵文化財センター(以下 県埋文))、西川町横岫楯跡（県埋文）、同水沢館（県埋文）、櫛引町柳沢館（櫛引町教委）、米沢市矢子山館（米沢市教委）、寒河江市木ノ沢館（県埋文）、西川町睦合館（県埋文）、それに東根市小田島城（県埋文）、大江町左沢楯山城（大江町教委）、米沢市館山（米沢市教委）などは引き続き調査続行中である。

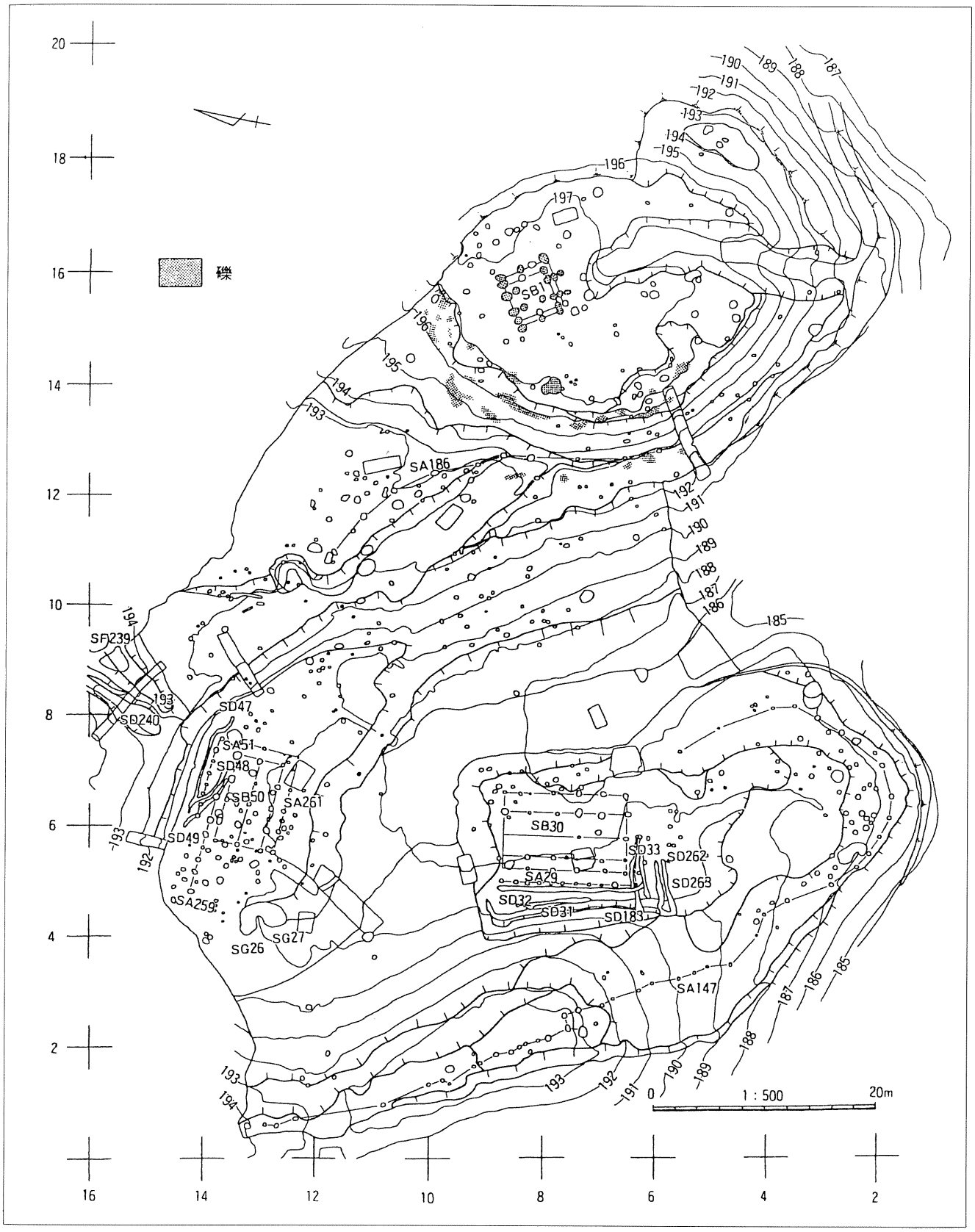
また都市再開発などにともない、地域の拠点的な城である藤島町藤島城（県埋文)は6次にわたる調査が行われ、山形城（山形市教委）、鶴ヶ岡城（県埋文）、酒田市亀ヶ崎城（県埋文）、新庄城（新庄市教委）、米沢城（県埋文・米沢市教委）などの郭や堀跡の一部が調査されている。方形館跡の発掘調査例については先にふれた。

ここでは、最近調査された西村山地域の二・三の例について、発掘のあらましを述べよう。寒河江市柴橋地区に所在する木ノ沢館は、最上川を南に望む平地部に張り出した丘陵の尾根の部分を占め、標高190メートル前後、比高は60メートルほどのところに位置する。第30図の縄張り図が示すように、4ヶ所の平場に郭（曲輪）が設けられているが、虎口が開く郭1がもっとも高い所にあり、羽黒神社があったところで、神社跡の礎石建物跡（SB1）の2×3間の堀立柱建物跡が検出されている。郭2にも建物があったらしいが、西側に柵列を巡らし、北西部には土塁と空堀が設けられ山頂部へつづき、さらに堀切をもって尾根を遮断している。谷の奥まったところに郭3があり、3×2間の堀立柱建物跡がある。郭4は谷を挟んで3の南側に位置し、よく整地されて長方形を呈する。ここからはもっとも大きい5×4間の建物跡が発掘された。（第30図）



第30図　木ノ沢楯縄張り図（高橋慎示氏作図に加筆）
（山形県埋蔵文化財センター「木ノ沢楯跡発掘調査報告書」1999）

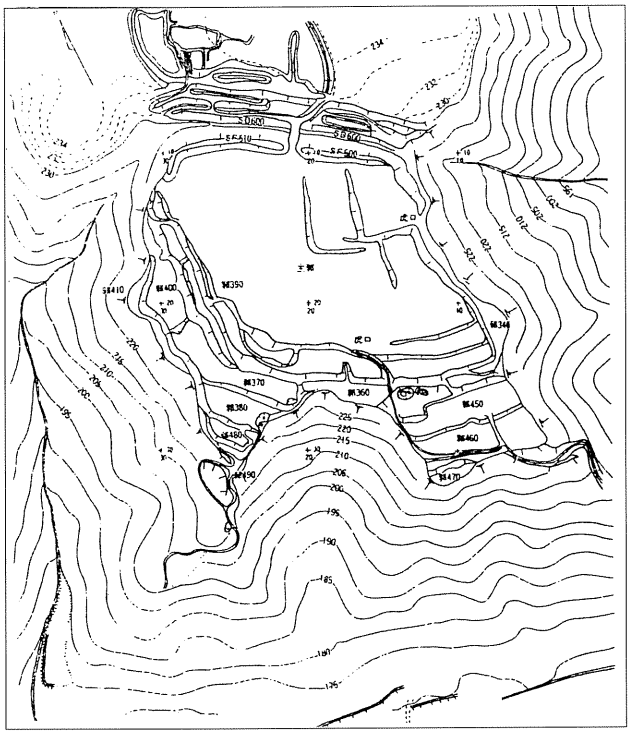
この館跡からは遺物の出土は少ない。「かわらけ」中世須恵器、瀬戸焼、青磁などの陶磁器破片若干と「永楽通宝」などの古銭22枚ほどであった。時期は15世紀後半と考えられ、大江氏一族の橋間氏の館と推定されている。



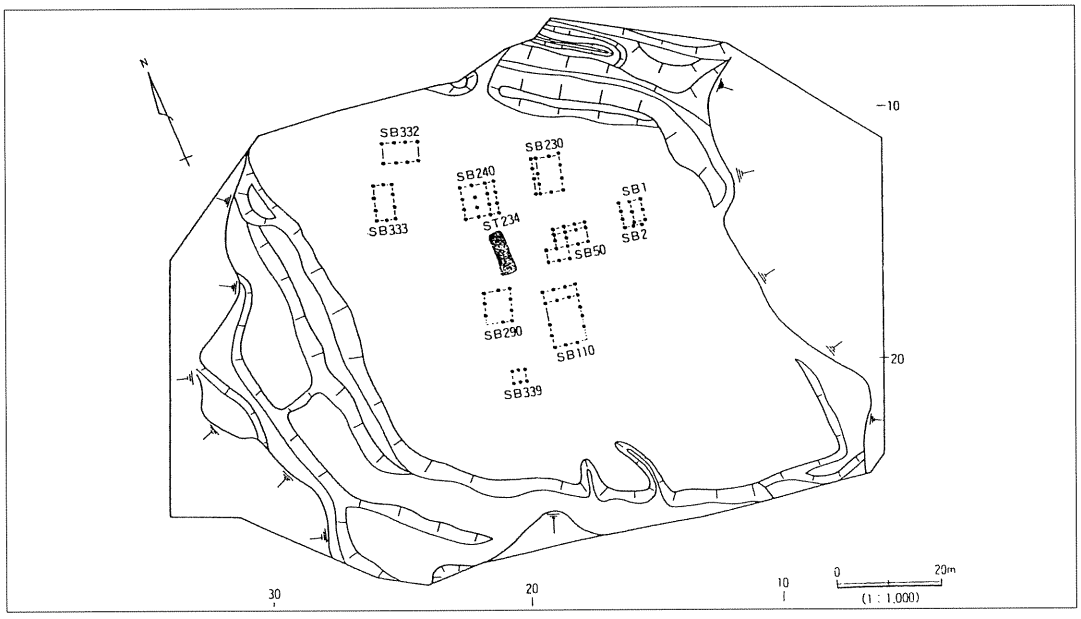
第31図　木ノ沢楯跡遺構配置図（山形県埋蔵文化財センター「木ノ沢楯跡発掘調査報告書」1999）

睦合館は西川町大字睦合にあり、寒河江川の左岸に位置し、標高220～235メートル。東北自動車道酒田線にかかるために1994年、主郭をはじめ、曲輪・土塁・掘などほぼ全域にわたり、10800平方メートルの発掘調査が県埋蔵文化財センターによって実施された。山城の全体にわたる調査としては、県内で数少ない例である。（第32・33図）

主郭は、南北70メートル、東西11メートルの菱形を呈し、30～50センチほどの段差がある。ここからは10棟の掘立柱による建物跡と竪穴式の建物、井戸跡などが検出された。この中には主殿・作業小屋・武器蔵などがあったのであろう。これらの建物跡は、柵列・掘・溝などで区画されている。竪穴建物からは、刀子・鉄鏃などが発見されているので、倉かあるいは製鉄に関連する工房跡の可能性もある。



第32図　睦合館跡縄張り図（山形県埋蔵文化財センター「睦合館跡発掘調査報告書」1999）



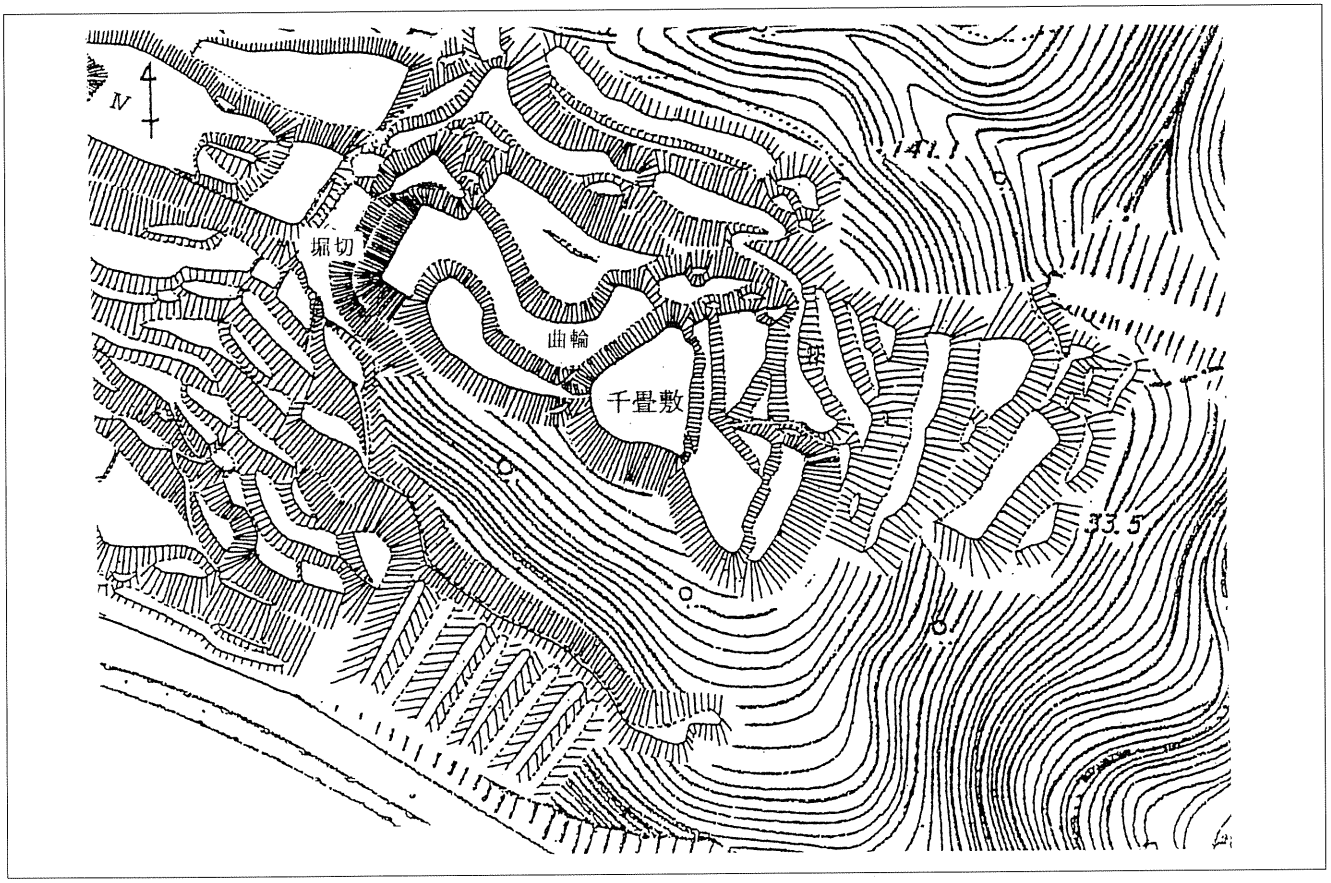
第33図　睦合館跡建物配置図（山形県埋蔵文化財センター「睦合館跡発掘調査報告書」1999）

主郭への虎口は東側と南側にひらき、東から西側へかけて15段にわたって曲輪が展開し、北側の尾根筋には三重にわたって掘切りと土塁が設けられる。街道筋からの東側が大手とすれば掘を越える北側は搦め手に当たるのであろうか。出土遺物は、青磁・白磁・染付などの輸入磁器、瀬戸・美濃焼系陶器の他、17世紀以降とされる唐津・肥前系陶磁器、石鉢や茶臼、銭貨、碁石、鉛玉こうがいなどもあり誠に興味深い。館跡として機能していたのは16世紀が中心であろう。

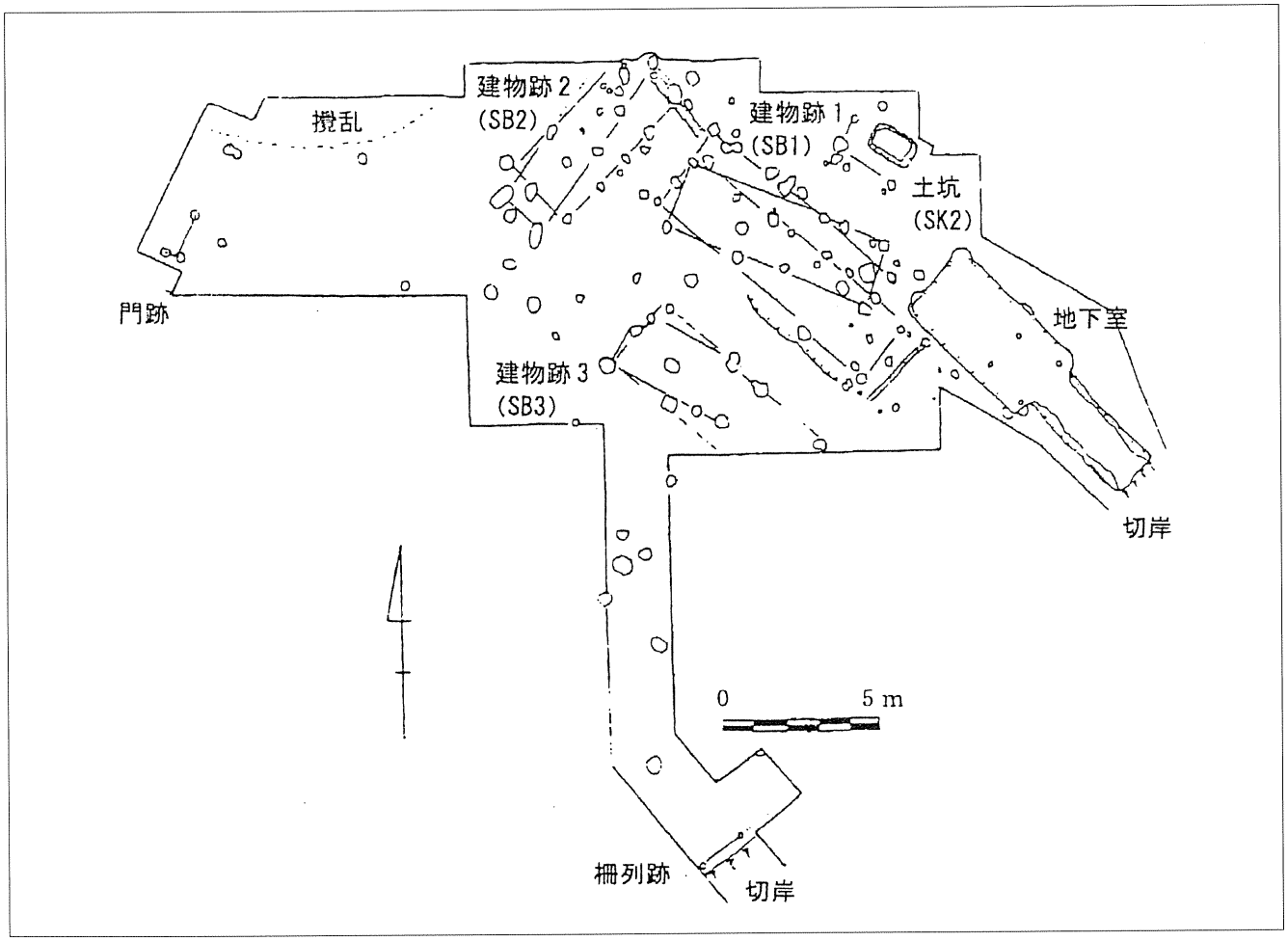
寒河江川流域は古くから庄内と村山を結ぶ「六十里越街道」であり、城館跡の分布が多く見られる。15世紀から16世紀前半には大江氏関連、16世紀後半以降は庄内を窺う最上氏系の館となるが、地域の地侍や土豪がつくったものが多かったのではないかと思われる。

かつて近世において最上川舟運の拠点であった大江町左沢に南北朝時代大江氏の氏族である大江元時が築城し、その後左沢氏を名のって戦国時代後期、最上氏によって滅亡に追い込まれるまで機能していた左沢楯山城が屹立している。標高222メートルの山頂を中心に四方に伸びる尾根に曲輪が設けられている。日本一公園も曲輪の一つである。史跡整備を目的に5年前から学術調査がおこなわれてきた。第2～3次にかけて行われた千畳敷といわれる曲輪は、最上川にもっとも近い場所を占める堅固な砦である。（第34図）

第34図　左沢楯山城略測図（大江町教育委員会「左沢楯山城遺跡調査報告書」第1～4集　1998～2001）



第35図　千畳敷周辺縄張り図（大江町教委　「左沢楯山城跡発掘調査報告書」第3集　2001）

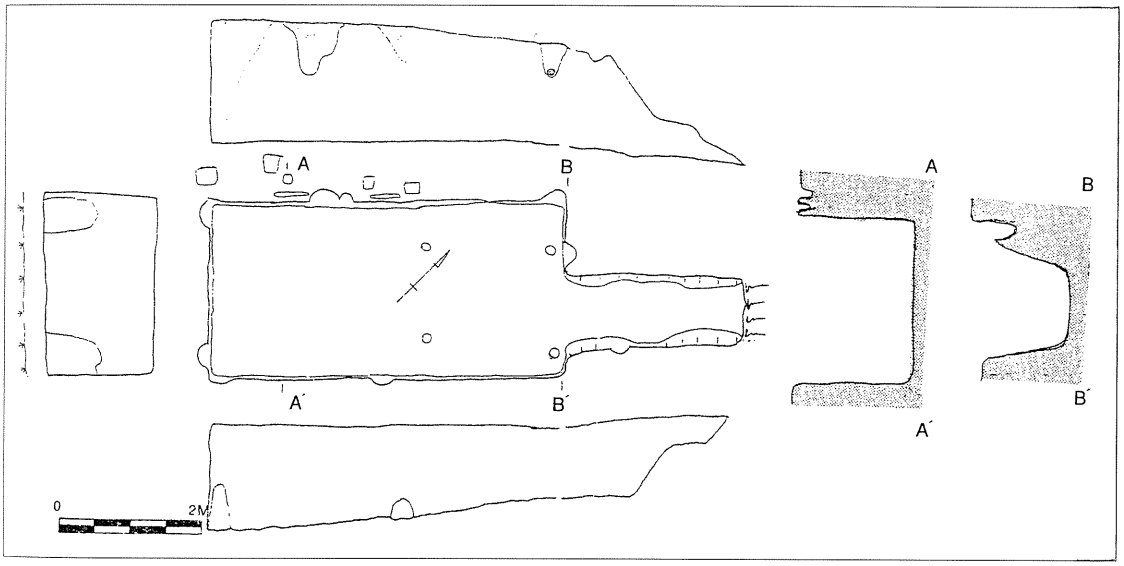


第36図　千畳敷遺構配置図（同上）

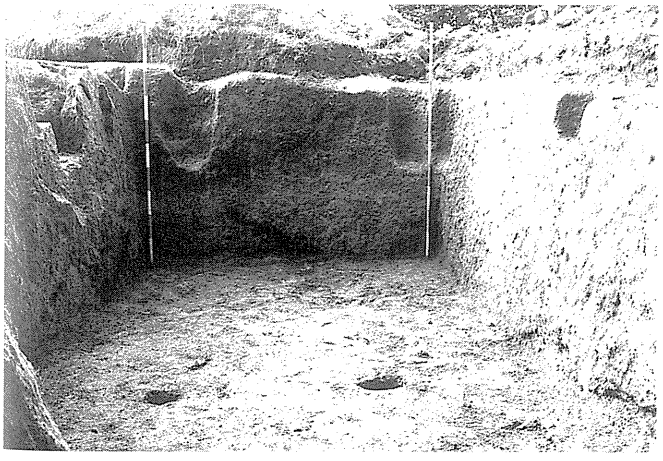
千畳敷は、標高194メートル、最上川の水面からの比高80メートル、南より流れる最上川が東へ向かって大きく屈曲するところに近く、最上川をおさえるのに適した場所に位置する。広さは800平方メートルで、平面形はほぼ三角状をなす。周囲には柵がめぐらされ、下の曲輪から上がる西側に門跡があり、岩盤をくりぬいた柱穴をもつ堀立柱建物が3棟発見された。これらは、2～3回立替えが行われている。主殿らしい4×2間の東西棟の東側後方から長さ4.5メートル、幅2.5メートル、深さ1.6メートルに長さ2.6メートルの狭い通路が切岸に開口する地下室が発掘された。平面形は羽子板状を呈する。床面は板が張ってあったらしく、うすく有機土がみとめられた。貯蔵蔵であったらしい。周囲には柱穴が見つかっているので、屋根で覆われていたと考えられる。

谷をへだてて千畳敷のさらに奥に「寺屋敷」といわれる平坦地があり、第4・5次の調査がその近辺で行われたが、5×5間の仏堂らしい建物が発掘され、前面に小さな池跡があり、2001年9月現在も調査続行中である。千畳敷の遺跡は、16世紀中葉から17世紀初頭、寺屋敷は15世紀中葉から16世紀の年代が考えられる。

このように発掘調査によって、中世山城の具体的な様相が次第に明らかになりつつあり、地上からはわからなかった建物跡や柵などの構築物や施設の姿がより新鮮にえがかれるようになった。



第37図　地下室平面断面図（同左）



第38図　千畳敷の地下室（同左）

コラム

城と合戦をみつめる目

城と合戦というと、戦国時代の小谷城等における老若男女構わぬ、凄惨な城の攻防を思い描くことが多いかもしれない。私たちは、夢半ばに倒れた武士の哀しみを感じ、古くは芭蕉が「つわものどもが・・・」と詠み、近代には「古城の城」を口ずさんでいるのではないだろうか。

また、私たちは、戦争というとアジア太平洋戦争を経験したこともあり、近代になって現れた「総力戦思想」つまり、政治、社会、経済、文化全てを戦争に動員して、どちらかが徹底的に破壊されるまで戦うという思想、に縛られている。しかし、中世の城館をめぐる合戦では、そういう戦いは少なかったであろう。

例えば、上杉氏と最上氏で戦われた長谷堂合戦は2週間にわたって城近辺で攻防を繰り返しているが、総力と総力が2週間激闘を繰り返したら、長期的に考えればその戦闘力は格段に落ちてしまい、その後の軍事行動に問題があろう。天正2年、同16年最上氏と伊達の合戦も小競り合いを続け、互いに決定的打撃を受けることもなく、双方の支配地域内でそれぞれの存在感を示す役割を果たした。とても双方が相手を叩きつぶそうという戦い方ではないようである。

その一方、雌雄を決めるべき戦いや、戦略上相手を殲滅すべき城をめぐる戦いがあったのも確かである。それは出羽合戦の前哨戦となった畑谷城（山辺町）の戦いのように1日で一気に城を落とす、というような戦い方ではなかったか。そこでは人々の口づてに残るように、凄惨な戦いがあったのであろう。

そうした合戦の時、人々は逃げ惑い荒らされる田畑を嘆いていたと考えられていたが、却って合戦を利用して雑兵として加わって一儲けしたり、合戦に乗じて盗賊のまねごとをしていたということも近年注目されるようになった。村や財産を守る努力した後の人々は合戦の最中、山の上からその経緯を一同で眺めてやんやと声を掛けていたかもしれない。

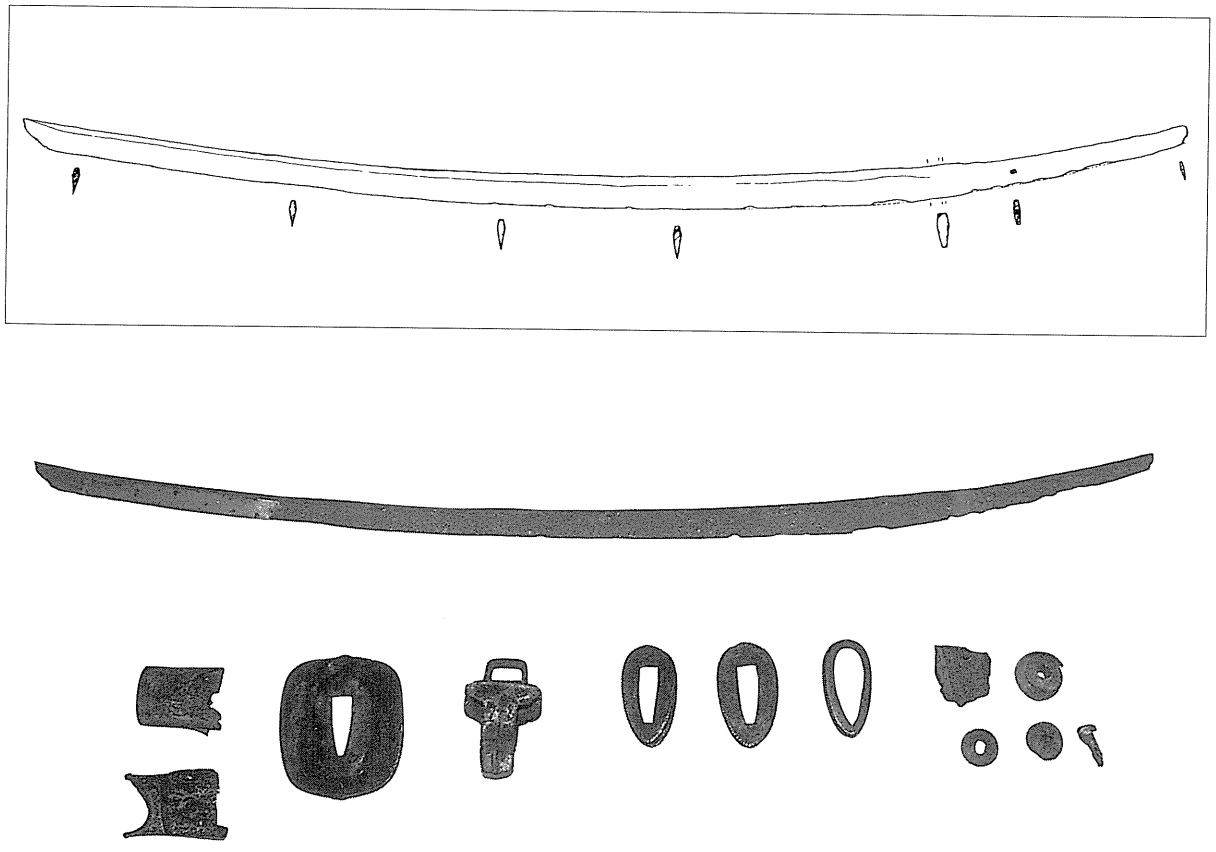
激しい合戦が行われた城館跡から、豊富に遺物が出土したということは聞かないが、そういう戦場跡では、合戦後すぐに僧侶らが敵味方の戦死者を弔い、葬ったことであろう。武器は、近隣の住民が夜盗のようにはぎ取り、武器商人に売り払ったりしたであろうし、落ちて放棄された城はすぐに略奪され、盗品は彼らの「ボーナス」になったであろう。城を破壊する儀礼や儀式も執り行われたであろう。

在地の人々は、武士に脅かされていたばかりではない、時には公然と時には密やかに戦いながら生きてきたのである。武士領民一同が全滅するまで戦い抜くというようなことはなかった。城と共に命運を共にした住民もいたし、住民も城にこもるということもあったが、それ以外の多くは比較的冷めた目で城、その合戦を見ていたことであろう。

3. 城館と人々のくらし

中世の遺跡から発掘される遺物は、古代の遺跡などに比べて少ないのが通例である。城館遺跡もその傾向がある事は否めない。城館の性格によっても異なるが、山城など日常の場でない詰めの城や陣城などからの出土遺物はいたって少ない。日常のくらしの場もかねた拠点的な本城や居館、そのまわりの屋敷地などからは、比較的遺物は多い。

それは城館が廃絶される際の状況も反映している。左沢楯山城などは、山城の建物が一切取り壊され、柱まで抜き取られ、まったくきれいに整理されていた跡をうかがうことができた。17世紀前半に行われた廃城令の結果を見事にあらわしている。近世までつづく城や以前に廃絶されている城館はわりと多くの遺物が見いだされる。これまで県内の発掘された城館跡で見るべき遺物が出土した例は、すでに述べた遊佐町大楯遺跡や藤島城や鶴ヶ岡城・山形城・東根小田島城などの外郭、米沢城二の丸などが挙げられるだろう。これらの遺物によって、城館の年代や存続期間を始め、城館での生活や在地との関連、物資の交易や他地域との交流、信仰の様相など中世社会の一端を読み解くことが可能となる。　平田町山谷に所在する山谷館は、南北朝期の興国5年（康永3年1344年）庄内における南朝勢が最後の拠点としたところで、葉室光世や中院具信・白河為興らの武将が戦死したところである。館跡の一角にある八幡森墳墓上には「応永8年（1401年）」銘の板碑が立ち江戸末期、中世須恵器の合口甕棺とともに太刀や刀装具類が発掘されその一部が現存する。（第39図）



第39図　山谷館　八幡森墳墓出土の太刀と鐔（つば）・足金具など

多分これらの遺跡は、南朝の有力武将の墳墓であり、応永の自然石板碑は供養のために立てられたものであろう。城館跡より太刀が出土している例は、山形市成沢城、上山市中山城、米沢城二の丸などがある。刀子や鉄鏃の類はわりあい県内でもいろいろな城館から出土している。西川町睦合館からは雁股の鉄鏃が発見されている。鉄砲が使用されるようになってからの「鉛玉」などもまま発見されることがある。城館跡から武器・武具の類が発見されるのは当然であるが、それらの材質は多く鉄であるために、さびなどのために失われている場合も多い。

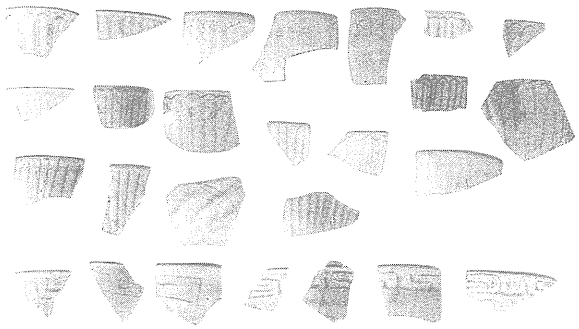
それにひきかえ普遍的に多く出土をみるのは、土器や陶磁器の類である。中世や近世の初頭の城館跡からは、使い捨ての酒器としてさかんに使用された素焼きの「かわらけ」がある。中には金泥を塗ったものも米沢城などから発見されている。中世では珠洲焼系中世須恵器（第40図他）、古瀬戸の瓶子（第13・15・41図他）、越前や常滑、瀬戸・美濃焼系の陶器が多く出土をみる。それに南宋から元・明などの青磁・白磁・染付、朝鮮の高麗青磁などの輸入陶器の破片もあり、広範な交易によってこのような高級な陶磁器ももたらされていることがわかる。それら陶磁器の出土の様相は時代や地域によってもちがいがある。例えば日本海にのぞむ庄内地域には、海運を通して珠洲焼や越前焼が多く見られ、内陸部には瀬戸・常滑・渥美焼系が比較的多い。

また時代がくだって近世に入ると、九州を本場とする唐津や伊万里などの肥前系陶磁器にかえられていく。米沢周辺では在地産の戸長里窯（米沢市）や岸窯（福島市）などの製品もあらわれる。

第40図　藤島城外郭出土の珠洲焼大甕

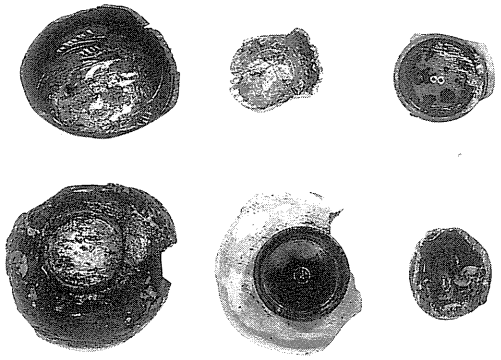
第41図　同　古瀬戸瓶子（梅瓶）

藤島城出土の遺跡

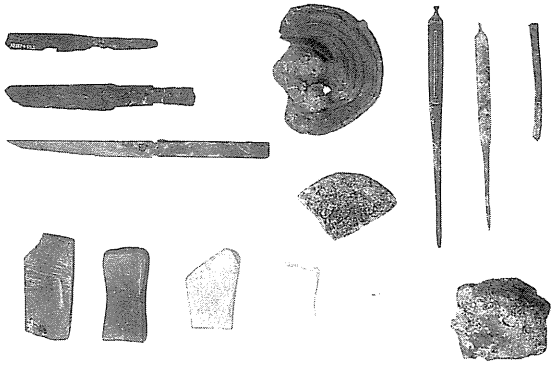


第42図　青磁

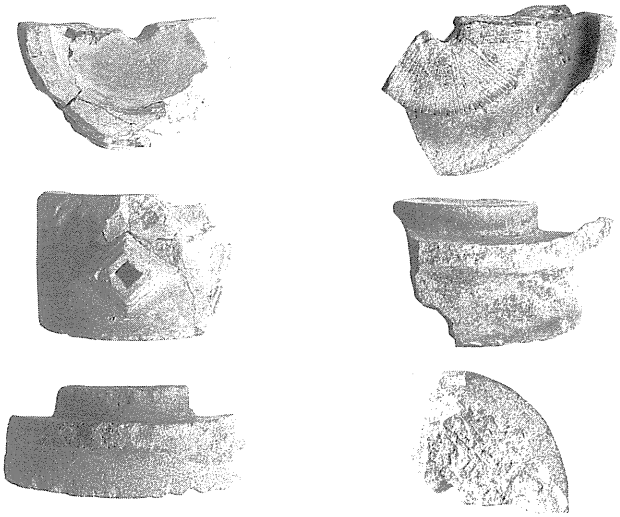
第43図　染付の磁器



第44図　漆器椀

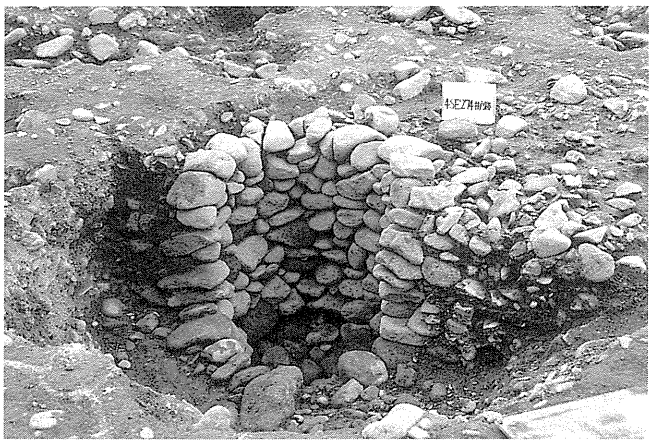


第45図　刀子・こうがい・砥石など



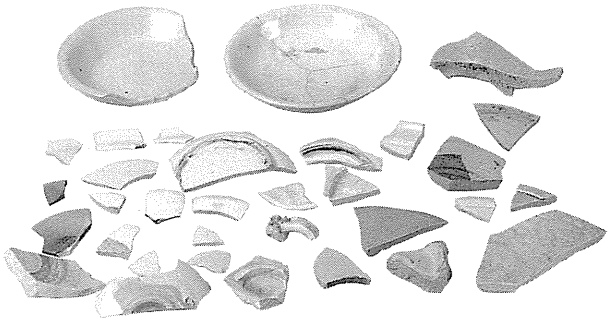
第46図　茶臼・石鉢

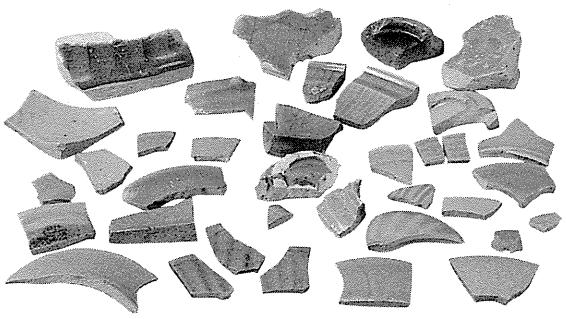
小田島城出土の遺物



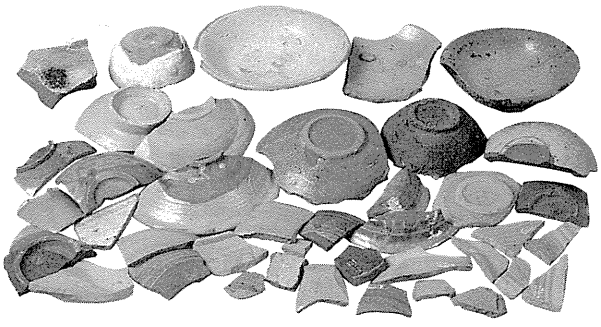
第47図　井戸跡

第48図　瀬戸焼の陶器





第49図　青磁・白磁・青白磁など中国輸入磁器



第50図　唐津焼の陶器

第51図　伊万里など肥前系磁器

米沢市周辺で特徴的な中世の土器に「内耳土鍋」がある。（22・23図）15～16世紀に盛んに使用されるが、県内ではこの地域以外にはない。福島県内からも出土をみるが、おおむね伊達氏支配の地に分布すると言われる。

中世に木器や木製品は多用されたらしいが、その材質から今に残るものは低湿地や掘などから発見されるものが大部分である。食器などでも、陶磁器以上に木地物が多かったと考えられる。それらの中には、盆・木椀・箸などの供膳具の他に、鍬や鋤・鎌など農具の柄、曲げもの、箆（へら）・斧の柄などの工具の一部、下駄やちゅう木（くそべら）などまで発見されている。トイレは、長方形や長円形の土抗として残る事があり、ちゅう木はその中から発見されることが多い。

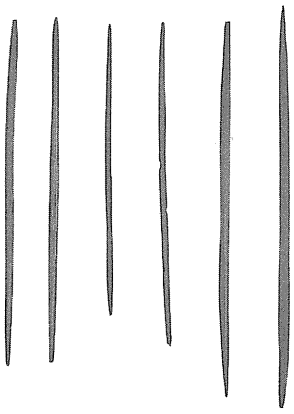
藤島城・山形城・米沢城・亀ヶ崎城・鶴ヶ岡城・我妻館・東屋敷館・小田島城などからは漆器椀が出土している。多くは内面赤漆、外面黒や赤漆のものが多い。赤漆に黒漆で松竹梅などの植物文様をえがいたものが見られる。また家紋をあらわしたものもある。米沢城の東二の丸からは、上杉の家紋をあらわした漆器椀も見つかった。またこれは江戸時代末期のものであるが、岩手県二戸郡浄法寺町でつくられた高台が高い特徴的な蒔絵による浄法寺椀が鶴岡城の二の丸跡から出土している。他に米沢市東屋敷館跡からは、黒漆塗りの鞍の一部が発見され、漆塗りの製品は掘跡や武家屋敷周辺からの発見が多い。

城館跡から石製の茶臼や石鉢などの出土もまま見られる。日常的な生活の場でもあった居館跡では食料の調達、また鍛治や日用品の生産、武器の製造なども行われたらしく、館の内部の竪穴建物などは、工房跡や作業小屋として利用された例もあった。山形城の一角からは、瓦を焼いた所もあったらしく、棒ヅクなどの窯道具が発見されている。

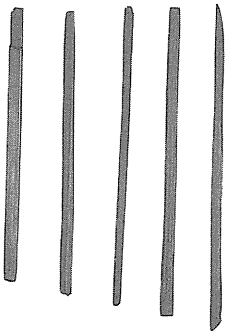
宗教関係や呪具などの遺物も発見されることが多い。呪符や笹塔婆（柿経）、木偶などの例があり、小形板碑などが出土することもある。村山市土生田館跡からは外郭の掘の内側の土塁基部より9基の小形板碑が出土した。近くに中世墓地があり、墓壙からも板碑が出土している。おそらく中世墓地に立っていた板碑をその信仰が失われてから再利用したものであろう。米沢市万世町早坂山城の麓の居館跡である早坂山b遺跡からも板碑やその残片が多数発見され、現地には今も龕殿形双体五輪板碑がたっている。城や館のなかで各種の呪術的な行事や仏教の行事がおこなわれたのであろう。館内に仏堂や祠や神社のある場合が殆どである。廃絶された館跡においてもその跡は明瞭に留めている例が多い。有力館主の居館の近くには、必ずと言ってもいいくらいに、氏寺や氏神が存在する。また屋敷内部に墓地のあることも少なくない。中世における信仰の様態をさぐる上で重要である。また、新たに建物を建てる際、地鎮のために銭貨を埋納する風習があり、村山市白鳥城下などでその例があり、古銭の出土はわりと多い。

かんざしやこうがいなどの発見されることもあり、城内に女性の姿が見え隠れする。また女性のものとは限らないが、銅鏡が藤島城や平形城から出土している。また女性がはいた下駄などもあり、非戦闘員であった女性と城館の関連を示しているようである。碁石やさいころなどの娯楽具も発見されており、文書・記録などの文献資料や絵巻物などの絵画資料などもとりいれて、中世の生活の復元がこころみられている。

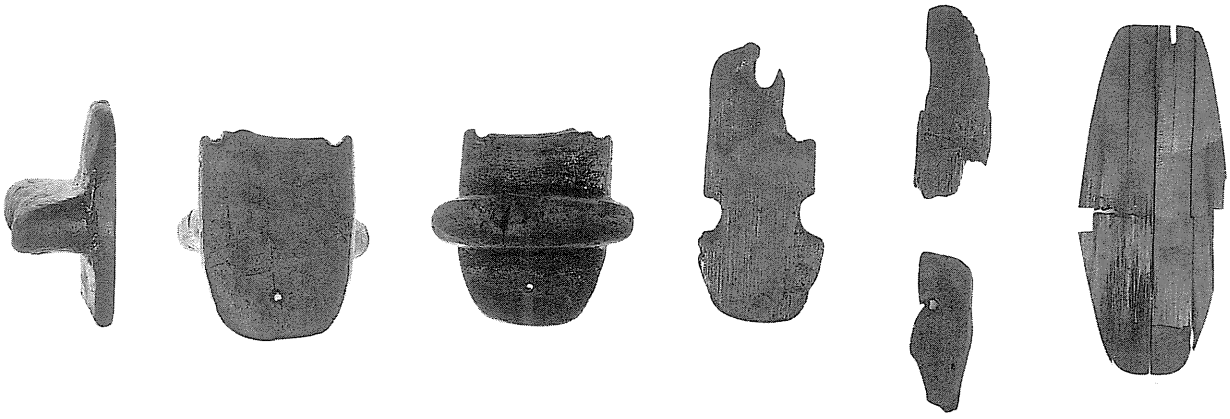
大楯遺跡出土の木製生活・宗教用具



第52図　箸

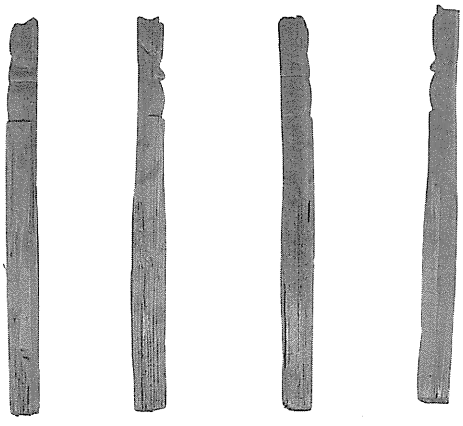


第53図　ちゅう木



第54図　下駄

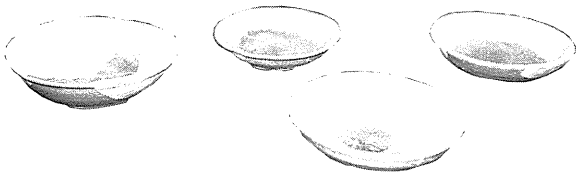
第55図　錫杖



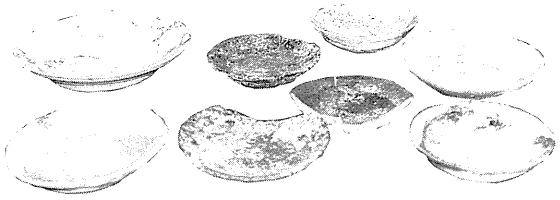
第56図　人形

米沢城　二の丸の出土遺物

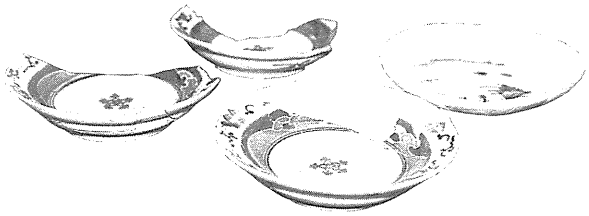
第57図　東二の丸障子掘

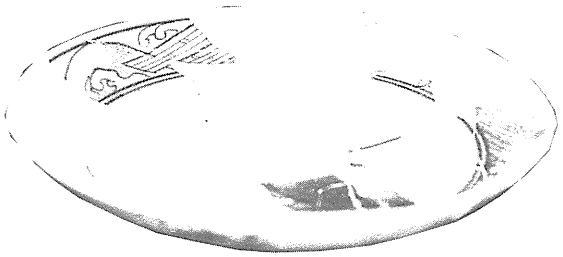


第58図　瀬戸菊小皿



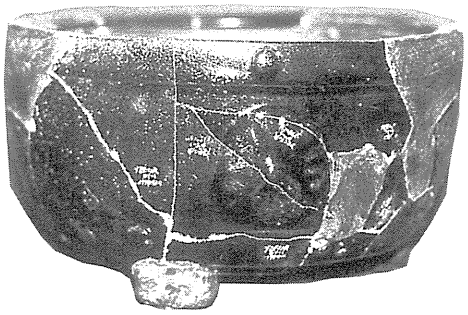
第59図　かわらけ類





第60図　肥前系皿

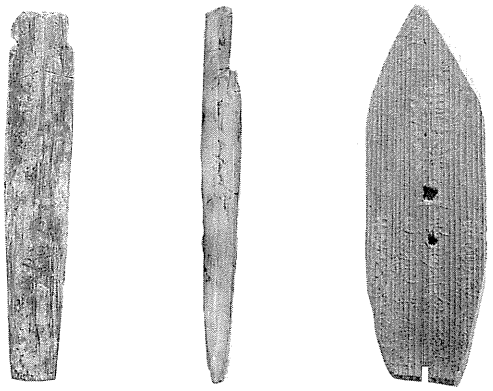
第61図　漆器椀



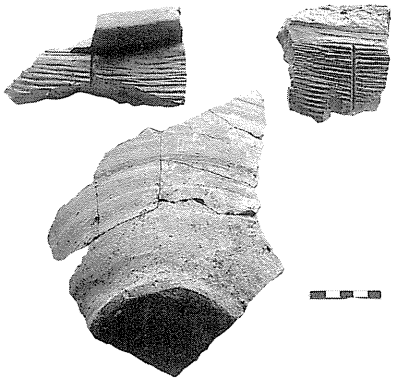
第62図　三脚付香炉（高10.4、径18.3）

鶴ヶ岡城　二の丸・百間堀の出土遺物

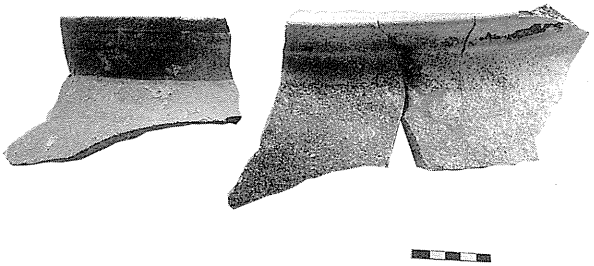
第63図　軒丸瓦



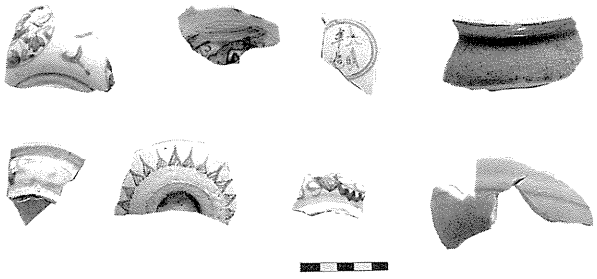
第64図　付け札木簡、呪符木簡



第65図　珠洲焼系陶器



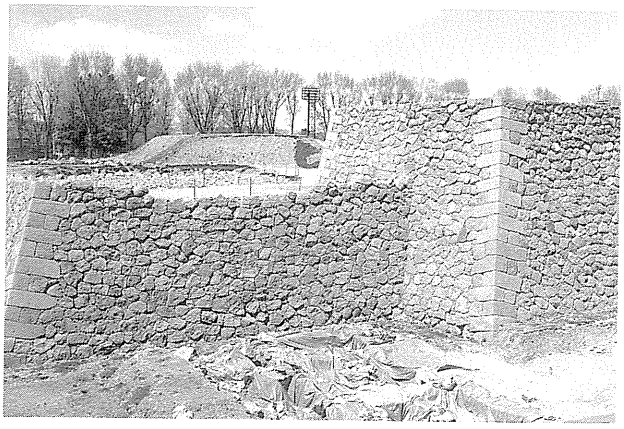
第66図　越前焼陶器



第67図　輸入磁器（景徳鎮磁器青磁）

第68図　ふいごの羽口

山形城本丸及び城南一丁目出土遺物

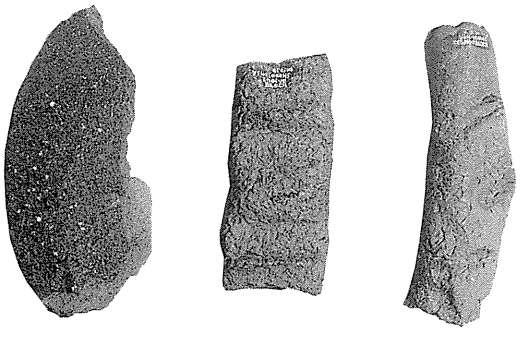


第69図　本石垣の復元

第70図　巴文軒丸瓦

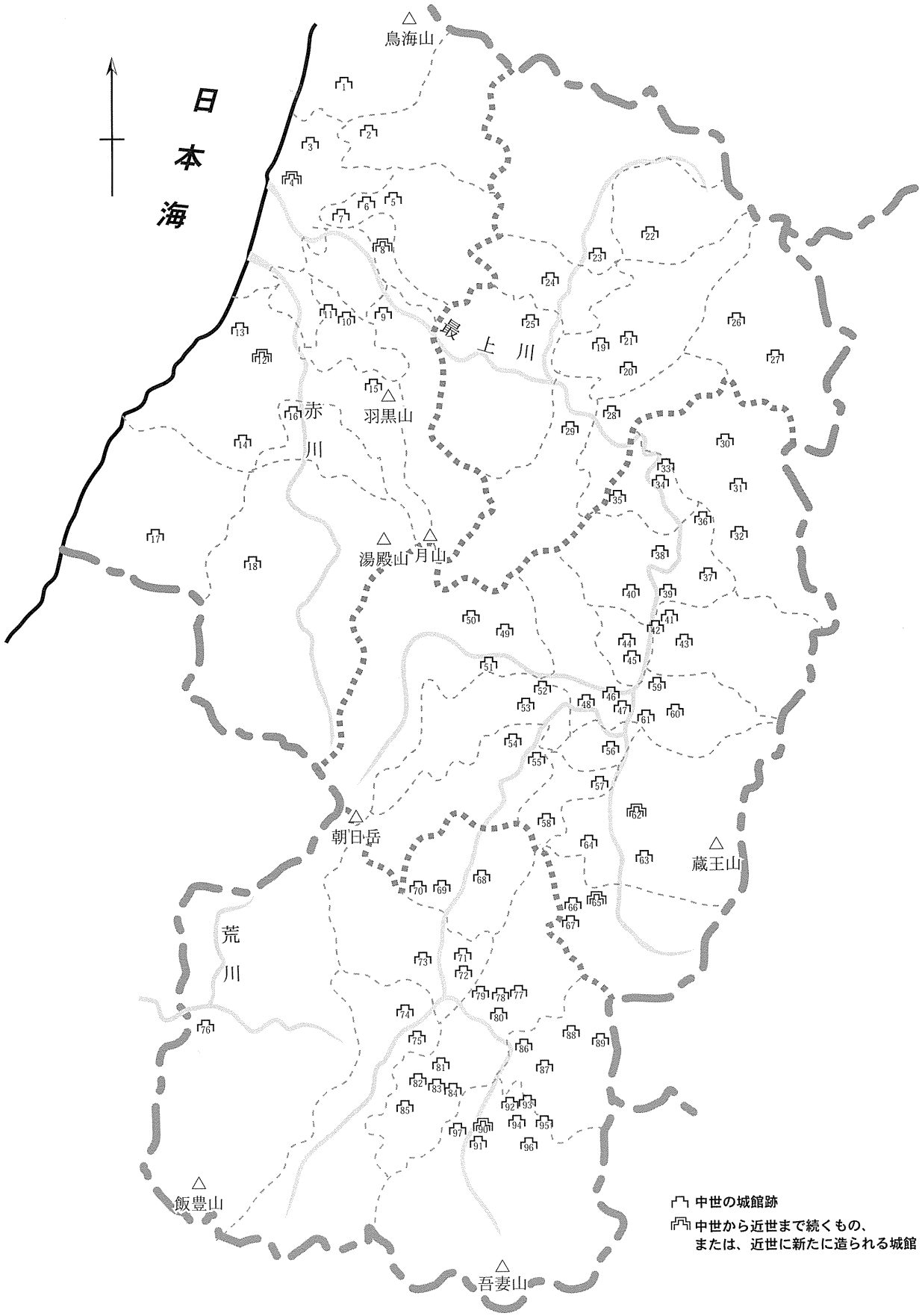
第71図　武家屋敷出土の織部焼陶器

第72図　志野焼大皿



第73図　棒ヅク・焼台（窯道具）

山形県内の主要城館跡分布図



山形県内の城館跡

1.大楯(おおだて)遺跡
2.観音寺(かんのんじ)城
3.新田目(あらため)城
4.亀ヶ崎(かめがさき)城(東禅寺城)
5.山谷(やまや)城
6.山楯(やま)
7.砂越(さごし)城
8.松山(まつやま)城
9.狩川(かりかわ)城
10.藤島(ふじしま)城
11.平形(ひらかた)城
12.鶴ヶ岡(つるがおか)城
13.尾浦(おうら)城
14.田川(たがわ)城
15.蝦夷(えぞ)館
16.丸岡(まるおか)城
17.小国(おぐに)城
18.名川(ながわ)城
19.新庄(しんじょう)城
20.乱馬堂(らんばどう)館
21.鳥越(とりごえ)館
22.金山(かねやま)館
23.鮭延(さけのべ)館
24.庭月(にわつき)館
25.古口(ふるくち)館
26.志茂ノ手(しものて)館
27.小国(おぐに)城
28.猿羽根(さばね)館
29.清水(しみず)館
30.森岡山(もりおか)館
31.兵沢遺跡(ひょうさわ)
32.延沢(のべさわ)城
33.鷹の巣(たかのす)館
34.駒籠(こまごめ)館
35.次年子(じねんご)館
36.土生田(とちうだ)館
37.楯岡(たておか)城
38.鬼甲城(おにかぶと)(富並(となみ)館)
39.河島山(かわしまやま)館
40.白鳥(しらとり)城
41.長瀞(ながとろ)城
42.長瀞本楯(ながとろもと)
43.小田島(おだしま)城
44.谷地(やち)城
45.溝延(みぞのべ)城
46.寒河江(さがえ)城
47.寒河江本楯(さがえもと)
48.木ノ沢(きのさわ)館
49.睦合(むつあい)館
50.水沢(みずさわ)館
51.吉川(よしかわ)館
52.左沢楯山(あてらざわたてやま)城
53.漆川(うるしがわ)城
54.八ツ沼(やつぬま)城
55.鳥屋ヶ森(とやがもり)城
56.中山(なかやま)城
57.山野辺(やまのべ)城
58.畑谷(はたや)城
59.二階堂(にかいどう)遺跡
60.天童古(てんどうこ)城
61.高擶(たかだま)城
62.山形(やまがた)城
63.成沢(なりさわ)城
64.長谷堂(はせどう)城
65.上山(かみのやま)城
66.高楯(たかだて)城
67.中山(なかやま)城
68.荒砥(あらと)城
69.鮎貝(あゆかい)城
70.高玉(たかだま)館
71.桑島(くわじま)館
72.小関(こせき)館
73.小桜(こざくら)城
74.萩生(はぎう)城
75.椿(つばき)館
76.小国(おぐに)城
77.二色根(にろね)城
78.宮沢(みやさわ)城(宮内(みやうち)館)
79.梨郷上(りんごうかみ)館
80.矢ノ目(やのめ)館
81.小松(こまつ)城
82.原田(はらだ)館
83.大坊屋敷(だいぼう)
84.洲ノ島(すのしま)館
85.松ノ木(まつのき)館
86.資福寺(しふくじ)館
87.高畑(たかばたけ)城
88.志田(しだ)館
89.屋代(やしろ)館
90.米沢(よねざわ)城
91.舘山(たてやま)城
92.東屋敷(ひがしやしき)館
93.長手(ながて)館
94.我妻(わがつま)館
95.木和田(きわだ)館
96.早坂山(はやさかやま)館
97.矢子山(やごやま)城

※各地域の拠点的城館を上げたのが、本文中に表れるものを主体としたので、必ずしも代表的城館という意味ではない。

第74図　蝦夷館（羽黒町）

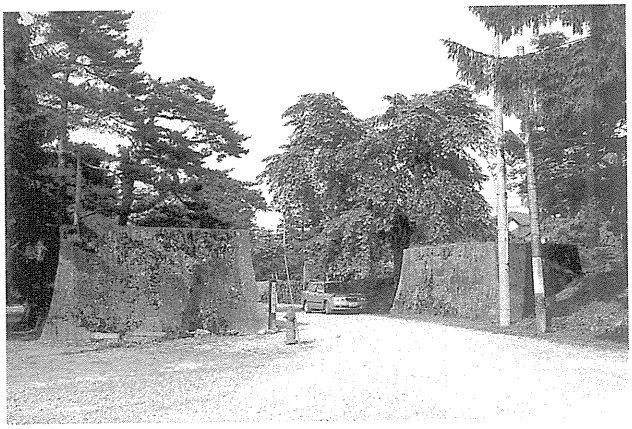
第75図　山谷館（平田町）

第76図　砂越城（平田町）

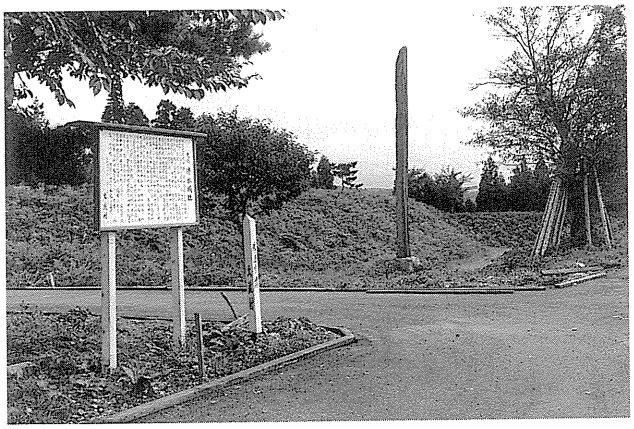
第77図　松山城大手門（松山町）

第78図　鶴ヶ岡城（鶴岡市）

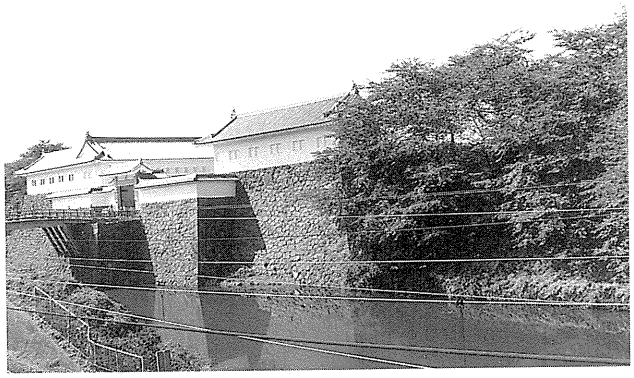
第79図　尾浦城（鶴岡市）



第80図　新庄城（新庄市）



第81図　清水城（大蔵村）



第82図　山形城（山形市）

第83図　長谷堂城（山形市）

第84図　米沢城（米沢市）

第85図　館山城（米沢市）

山形県城館研究文献目録

本文の引用参考文献を含む

本目録について

1. 全体を［単行本］［調査報告書］［個別論文など］［図録・その他］にわけた。
2. 「山形県史」をはじめ各市町村史など自治体史などでは、それぞれの地域の城館跡について詳細にふれているが、県内44市町村において大方刊行されているので割愛した。
3. 主として最近の文献を挙げ、近世の文献などは省略した。
4. 物語風のもの、人物を主体とするもの、文学作品などは挙げていない。
5. 「置賜文化」や「最上地域史研究」、各地域の研究組織において発行している研究誌には、時間的な余裕がなかったので、収録できなかった。
6. おおむね、書名（論文名）－著者名（執筆者名）－（収載書・雑誌名）－（発行所）－発行年の順序で収録してある。
7. 調査報告書は、各機関において発掘調査を実施した報告書であるが、「遺跡名」のみとし、「発掘調査報告書」の名称は省略した。
8. 原則として年次ごとに挙げたが、必ずしもそうなっていない場合もある。
9. 遺漏が多いとおもわれるので、大方のご教示をお願いしたい。今後、より完全なものにしていきたい。

［単行本］

「郡内の古楯跡」	嶺 金太郎	最上郡資料叢書	1925
「楯岡城址と城主の興廃」	早坂忠雄	（楯岡町）	1937
「清水城址」	斎藤仙鳳	（大蔵村）	1940
「山形県内に於ける古城跡の研究」	長井政太郎他	山形県中央図書館	1941
「山形県文化史第３巻」	丸山 茂	山形県分化普及会	1949
「ふるさとの城」	後藤嘉一他	山形新聞社	1961
「風雲山形城」	後藤貞弘	詩趣会	1964
「寒河江城を語る」	沖津常太郎	史談会	1966
「日本城郭全集第２巻」	後藤嘉一他	人物往来社	1967
「最上時代山形城下絵図」	高橋信敬	詩趣会	1974
「最上四十八館の研究」	丸山 茂	歴史図書社	1978
「出羽諸城の研究」	沼館愛三	伊吉書院	1980
「日本城郭体系第３巻」	川崎利夫他	新人物往来社	1981
「風雲天童城」	渡部克司		1981
「図説中世城郭辞典１」	村田修三　監修	新人物往来社	1987
「寒河江大江氏」	阿部酉喜夫	記念事業実行委員会	1988
「山形合戦」	鈴木和吉		1990
「中世戦乱の村山　中世の東根」	保角里志		1991
「天童の城と館」	川崎・山口・村山	天童市教育委員会	1993
「中世の城郭楯岡城」	高楯城跡調査会	上山市教育委員会	1994
「中世の城と祈り-出羽南部を中心に-」	伊藤清郎	岩田書院	1998
「中世の山形と大江氏」	県立米沢女子短期大学		2000

［調査報告書］

山形県史跡名勝天然記念物調査報告	第１～第３編		1925～28
西高玉本館遺構試掘報告		白鷹町教育委員会	1978
庄内藤島城跡	県埋文　25	山形県教育委員会	1979
平形遺跡・周辺遺跡	県埋文　26	山形県教育委員会	1980
乱馬堂遺跡	新庄埋文　6	新庄市教育委員会	1982
清水城趾	大蔵文化財　1	大蔵村教育委員会	1983
寒河江城跡　昭和60年度	寒河江埋文	寒河江市教育委員会	1986
木和田館 第１次	米沢埋文　20	米沢市史編纂委・米沢市教委	1987
新庄城東南隅櫓跡	新庄埋文　7	新庄市教育委員会	1988
大楯遺跡 第１次	県埋文　121	山形県教育委員会	1988
土生田楯遺跡		村山市教育委員会	1989
大楯遺跡 第２次	県埋文　139	山形県教育委員会	1989

大塚城跡	県埋文　161	山形県教育委員会	1990
早坂山b遺跡	県埋文　154	山形県教育委員会	1990
藤島城跡第２次	県埋文　159	山形県教育委員会	1990
亀ヶ崎城跡	県埋文　169	山形県教育委員会	1991
荒谷館東郭	山辺埋文　3	山辺町教育委員会	1991
大楯遺跡第３・４次		遊佐町教育委員会	1991
矢子山城跡１	米沢埋文　41	米沢市教育委員会	1991
山楯楯跡	県埋文　172	山形県教育委員会	1992
黒藤館跡の調査	白鷹埋文　3	白鷹町教育委員会	1993
白山森遺跡（概報）	長井埋文　9	長井市教育委員会	1993
あたご山館・館之沢遺跡・飯沢館	長井埋文　8	長井県教育委員会	1993
飯塚館跡	埋文セ　2	山形県埋蔵文化財センター	1994
亀ヶ崎城跡第２次	埋文セ　17	山形県埋蔵文化財センター	1994
黒藤館跡	埋文セ　16	山形県埋蔵文化財センター	1994
米沢城	米沢埋文　44	米沢市教育委員会	1994
鍬の町・和合北目地区遺跡詳細分布調査報告	天童埋文　8	天童市教育委員会	1995
山形県中世城館遺跡調査報告	第１集（置賜地域）	山形県教育委員会	1995
亀ヶ崎城跡第３次	埋文セ　28	山形県埋蔵文化財センター	1995
我妻館跡	米沢埋文　50	米沢市教育委員会	1995
山形県中世城館遺跡調査報告	第２集（村山地域）	山形県教育委員会	1996
横岫楯跡水沢館跡	埋文セ　39	山形県埋蔵文化財センター	1996
山形城本丸堀（概報）		山形市教育委員会	1996
荒川２遺跡	埋文セ　43	山形県埋蔵文化財センター	1997
北作古屋敷館跡	山辺埋文　5	山辺町教育委員会	1997
東屋敷館跡	米沢埋文　58	米沢市教育委員会	1998
左沢楯山城遺跡	大江埋文　2	大江町教育委員会	1999
落衣長者屋敷遺跡	寒河江埋文　19	寒河江市教育委員会	1999
安中坊遺跡予備調査		西川町教育委員会	1999
山形県中世城館遺跡調査報告	第３集（庄内・最上地域）	山形県教育委員会	1999
木の沢楯跡	埋文セ　62	山形県埋蔵文化財センター	1999
城南一丁目遺跡	埋文セ　69	山形県埋蔵文化財センター	1999
睦合館跡	埋文セ	山形県埋蔵文化財センター	1999
丸山日陰館跡	米沢埋文　64	米沢市教育委員会	1999
左沢楯山城遺跡	大江埋文　3	大江町教育委員会	2000
米沢城東二の丸跡	米沢埋文　68	米沢市教育委員会	2000
左沢楯山城遺跡	大江埋文　4	大江町教育委員会	2001
鶴ヶ岡城跡（二の丸南辺地点）	鶴岡埋文　14	鶴岡市教育委員会	2001
安中坊遺跡	西川埋文　4	西川町教育委員会	2001

[個別論文など]

最上郡町村大字小字古楯跡明細録	伊藤吉雄	舟形町史編纂資料３所収	1917
立谷沢城址調査書	阿部正己	軍事史研究　3－6	1938
藤島城	田代洗太郎	史跡名勝天然記念物　13－6	1938
左沢城址	沖津常太郎	山形県文化時報 71	1940
鶴ヶ岡城	大瀬欽哉	山形県文化時報 75	1943
湯田川の城砦	丸山 茂	羽陽文化 2	1949
寒河江城址	菅井半五郎	市史編纂書 2	1953
伊達政宗誕生地に関する考察	中村忠雄	置賜文化 18	1958
国分氏と萩生城址	高橋堅治	置賜文化 19	1958
色部氏とその城址	高橋堅治	置賜文化 21	1959
小漆川城跡について	沖津常太郎	羽陽文化 67・68	1965
細谷城の戦	安久津久造	羽陽文化 68・69	1965
城と城下町の研究－特に町割と地名について	高橋信敬	山大史学 3	1965

長井氏以前の米沢付暦仁元年 米沢築城説について	中村忠雄	置賜文化 38	1966
古城めぐり 鶴岡城	藤崎定久	大塚薬報 196	1967
栖島城址について	大河原謙太郎	置賜文化	1971
山形県尾花沢市堀の内遺跡発掘調査概報	堀の内遺跡調査団	山形考古 2-2	1973
天童史跡八幡山古戦場誌	須藤重治	八幡山古戦場址保存会	1974
庄内地方の城館（楯）跡について	佐々木七郎・酒井英一	庄内考古学 14	1977
山形県における城館跡研究ノート	保角里志	庄内考古学 14	1977
古代村山郡衙比定地をめぐって －尾花沢堀の内遺跡説批判－		山形考古 3-1	1977
清水氏関係資料についての若干の考察	佐久間 昇	最上地域史 1	1978
米沢地方の城館跡(1)	秦 昭繁	置賜考古 5	1979
中世城館跡研究－立谷川扇状地－	村山正市	天童の歴史 1	1979
尾花沢盆地の城館跡	保角里志	庄内考古17	1980
最上川流域の城館跡について	保角里志	「最上川」所収	1982
尾花沢盆地の城館跡を探る	保角里志	山形県地域史研究 6	1983
大塚城址と林崎の館について	渋谷敏己	山形県地域史研究 7	1984
本館遺構の発掘について	金田 章	山形県地域史研究 7	1984
城館跡の縄張図作成とその応用 －現地作業と図化の方法－	手塚 孝	まんぎり 4	1985
延沢城・延沢氏について	奥山誉男	山形県地域史研究 11	1985
東根城絵図について	太田浩雅	山形県地域史研究 11	1985
旧最上郡域の中世城郭と戦国末期の争乱	松田 進	中世城郭研究 4	1987
高擶城の興亡－戦国騒乱期を中心として－	萩野和夫	山形県立博物館研究報告 8 号	1987
中世城館をめぐって	伊藤清郎	西村山地域史の研究 7	1989
陣山館跡（山形県上山市）について	松田 進	中世城郭研究 4	1990
天童市内の中世城館跡	川崎利夫	天童郷土研究会解放 18	1990
中世城館址　伏熊城について	松田 進	西村山地域史の研究 8	1990
日和田楯について	宇井啓・大宮富善	西村山地域史の研究 8	1990
溝延城について	北畠教爾	西村山地域史の研究 8	1990
最上氏と長谷堂合戦	誉田慶信	放送による東北大学解放講座	1990
雁城の由来と二の丸の回生	吉田達雄	山形県地域史研究 16	1990
城館跡から地域の歴史を探る	保角里志	山形県地域史研究 16	1990
畑谷城跡（山形県山辺町）について	松田 進	中世城郭研究 5	1991
天童古城の調査	川崎利夫	天童郷土研究会解放 19	1991
谷地城の構築とその周辺について	鈴木聖雄	西村山地域史の研究 9	1991
八ツ沼城	鈴木治郎	西村山地域史の研究 9	1991
米沢の中世城館跡	菊地政信	山形県地域史研究 17	1991
寒河江城をめぐって	大宮富善	西村山地域史の研究 10	1992
沼の平城と要害森楯	松田皎月・鈴木聖雄	西村山地域史の研究 10	1992
山形盆地北半の城館跡	保角里志	西村山地域史の研究 10	1992
摩耶山地の中世城館跡分布	酒井英一	山形県総合学術調査報告摩耶山	1992
「境目の城」と城の破却－最上領の場合－	誉田慶信	「野に生きる考古・歴史と教育」	1993
「鉢巻式」山城試論	伊藤清郎	「野に生きる考古・歴史と教育」	1993
左沢楯山城に関する－考察	鈴木 勲	「野に生きる考古・歴史と教育」	1993
尾花沢盆地の中世城館跡について	保角里志	「野に生きる考古・歴史と教育」	1993
庄内地方における考古学上の中世成立期	佐藤禎宏	「野に生きる考古・歴史と教育」	1993
地名と中世城館	石井浩幸	「野に生きる考古・歴史と教育」	1993
山楯雑考	真壁 健	「野に生きる考古・歴史と教育」	1993
村山市土生田楯について	石井浩幸	山形県地域史研究 18	1993
山形県の中世城館跡をめぐって	伊藤清郎	山形県地域史研究 18	1993
条理から東根城へ	保角里志	山形考古 5-1	1993
八ツ沼城の研究－朝日町の中世城郭をめぐって－	田宮 浩	山形史学研究 26	1993
城郭調査と中世社会	村田修三	西村山地域史の研究 12	1994

萩生城跡について	後藤正浩	山形県地域史研究 19	1994
山形県の高地性防御集落遺跡について	保角里志	山形考古 5 - 2	1994
遊佐荘と大楯遺跡	伊藤邦弘	歴史評論 535	1994
湯野沢城楯とその周辺 －村山市河西地区の中世城郭－	熊谷宣昭	「西村山の歴史と文化 3」	1995
山形県藤島町藤島城出土の金属製品	水戸弘美	山形考古 6 - 3	1996
観音寺城に関する－考察	庄司 誠	山形史学研究 27・28・29	1996
近世東根城について	保角里志	山形史学研究 27・28・29	1996
山形最上領の陣城と堀	誉田慶信	山形史学研究 27・28・29	1996
大楯遺跡再考	飯村 均・八重樫忠郎	歴史手帳 24-10	1996
大楯遺跡と中世出羽国	藤原良章	歴史手帳 24-10	1996
大楯地名考	岡陽一郎	歴史手帳 24-10	1996
遊佐大楯遺跡と鎌倉	河野真治郎	歴史手帳 24-10	1996
遊佐町大楯遺跡について	伊藤邦弘	歴史手帳 24-10	1996
山形県内における 中世城郭館跡発掘調査の現状について	真壁 健	六軒丁中世史研究 4	1996
寒河江城出土遺物の再検討	山口博之	西村山地域史の研究 15	1997
城館跡からみた地域史	保角里志	山形県地域史研究 22	1997
最上地方における中世城館跡について	長沢正機	山形県地域史研究 22	1997
山形県最上郡最上町の城館跡	保角里志	さあべい 15	1998
伊達氏系城館論序説	松岡 進	中世城郭研究 7	1998
大江町城郭ノート 堀のある山城について	横山勝栄	西村山地域史の研究 16	1998
東根市大森山城について －伝説の古城に発見された城館遺跡－	保角里志	工藤定雄先生を偲ぶやまがたの地域史	1998
最上氏初期の城館跡	保角里志	北村山の歴史 1	1999
舞鶴山が見てきた天童の歴史	山口博之	郷土てんどう 27	1999
最上郡域における城館跡の類型論的考察	松岡 進	さあべい 16	1999
山形県尾花沢・大石田地方の中小規模城館跡	保角里志	さあべい 16	1999
首が護る城	山口博之	帝京大学山梨文化財研究所研究報告第 9 集	1999
尾花沢地方寺内の大規模な二つの山城跡	保角里志	北村山の歴史 2	2000
山形県尾花沢・大石田地方の大規模な 山城跡について	保角里志	さあべい 17	2000
山形県酒田市及び飽海郡平田町 山間部における城館跡	小松良博	さあべい 17	2000
中世出羽国における地方都市的場	伊藤清郎	中世都市研究 7	2000
米沢城とその周辺	高桑 登・山口博之	中世都市研究 7	2000
境目の城「高楯城跡」を歩き考える	保角里志	羽陽文化 144	2000
西川町における中世の戦乱 －城館の遺構とその背景－	鈴木聖雄		2000
村山市西部地域の城館跡	保角里志	北村山の歴史 3	2001
越王山北館について	川崎利夫	郷土てんどう 29	2001
白鷹丘陵南西部に分布する城館跡 小滝街道と最上氏関連の城館跡について	茨木光裕	さあべい 17	2001
フィールドノート堀切の周辺	横山勝栄	さあべい 18	2001
山形県のおける畝状空堀をもつ城館跡について	保角里志	さあべい 18	2001
方形居館の出現と展開－出羽南部を中心として－		山形最古 7 - 1	2001

［図録・その他］

図録山形県城郭古絵図展		最上義光歴史館	1989
東根城の話	（私家本）	保角里志	1996

～解　説～

「山形県における中世城館跡」

伊藤　清郎

はじめに・・・

(1)　研究・調査の現状

まず、県内における研究・調査の状況を概観してみる。1988年から山形県教育委員会が「山形県中世城館址調査」を開始し、『山形県中世城館遺跡調査報告書』第１集・２集・３集（1995年～1997年）が順次刊行された。またこの間、1989年には「山形県城郭研究会」が発足し、県内の調査・研究者の交流を図りながら調査・研究の水準を高めていった。

ここで得られた成果は、以降の自治体史編纂や地域史の解明に大きく反映していくこととなる。さらに従来からの研究者に加えて、若い研究者の参加と活躍が目立ってきていることも、注目すべき事である。

このように研究・調査の裾野が広がってくる中で、報告書段階では見つからなかった城郭も確認されるようになってきているのも、喜ばしいことである。

(2)　方形館から根小屋式山城

県内の中世城郭の変遷の大筋としては以下のようになろう。11世紀末頃に方形館が現れ（米沢市の木和田館）、奥羽合戦の後、地頭として入り込んできた御家人の居館も、寒河江荘の地頭大江氏の本楯（寒河江市）、成生荘の地頭二階堂氏の二階堂屋敷（天童市）に見るように、おおよそ方1町の方形館である。しかも陸路・舟運等、交通の要衝に設けられている。やがて13世紀末鎌倉末・南北朝期に入り戦乱状況が続くと、より防御の堅い居館と詰めの山城が一体となった根小屋式山城が登場する。さらに、戦国期には、戦国大名の領国が形成されていくとともに、山城の部分等の築城技術が進み、桝形虎口・畝状堅掘・馬出等が見えてくる。

近世豊臣期にはいると、石垣築造の影響も見えはじめ、江戸初期関ヶ原の合戦・出羽合戦に勝利した最上氏が57万石の領地を与えられて城下町建設に着手し、築城が最高潮に達した。しかし、秀吉による破城や元和元年（1615）江戸幕府による一国一城令にもかかわらず、最上領国内には中世以来の城郭が温存されていた。しかし元和8年（1622）最上氏が改易され、譜代大名や天領などが配置されると、それらの城郭は廃城となり、近世的様相を呈することとなる。だいたい以上のように想定されている。

以下、戦乱の中で民衆は如何に対処したのか、領主たちは領地・領国を如何に護り平和と安穏を実現しようとしたのか、またそのうち特に祈りと城郭の関係や、海と河にのぞむ城郭の様相、などにふれてみたい。

1　百姓の城・村の館

戦乱に巻き込まれたとき、百姓たちはどのような危機管理を行い、生命と財産を如何にして護ったのであろうか。

天正12年（1584）最上氏と天童八館が戦ったいわゆる天童合戦の際、天童古城（舞鶴山）に立て籠もった人数が「都合三千余人」で、その中にかき集められた「土民等」もいた。最上勢の二度の攻撃によってついには落城するのであるが、武将の様相は詳細に記すが、「土民」たちの生死にはふれていない（『奥羽永慶軍記』「羽州天童合戦ノ事」）。同じく天正12年谷地の白鳥氏、寒河江の大江氏が最上氏に攻められて滅亡した際、「谷地・寒河江ノ浜二近邑ノ土民馳集テ二千余人、同ク時ヲ合セ、弓・鉄砲ヲ以テ防キケリ」とあって、やはり農民たちは合戦に動員されている（同「谷地・寒河江落城ノ事」）。慶長5年（1600）上杉勢に攻められて畑谷城が落城した際、最上氏は後詰め（救援・応援）として山形から飯田・

谷桐・冨並・日野各氏を派遣するが、引きも切らず逃げてくる「女童」と遭遇する（同「最上畑屋落城事」。山辺町の城郭については、後藤禮三氏・佐藤継雄氏らのご教示を得ている。）そしていよいよ長谷堂での合戦が迫ってくると、「山形ノ町人等ハ、会津勢モハヤ上ノ山・長谷堂ヲ攻破リ山形ニ乱入トイフモノアレハ、イヤトヨ明々日押寄ルナト取々ニイフ程コソアレ、手ニ々々財宝ヲ持運ヒ、売物モカツキツレテ或ハ東根ノ幽谷、山寺ノ深山ニ忍フモアリ、或いは山々ノ奥ヲ求メテ逃行ハ、軍兵トモ矢惘レ果タル風情也」とあって（同「長谷堂合戦、附鮭登働事」）、山形城下の民衆が右往左往する姿が描かれている。

このように軍記・物語では、為すすべもなく村や町を焼かれ、命を落とす町人・農民が描かれている。しかし、これは町人・農民の真の姿であろうか。そうではない。近年の研究は、たくましい中世民衆の姿を明らかにしつつある。自力救済の世にあって、百姓の城・村の城を造り、一致団結して戦い、生命、そしてわずかながらも財産を必死に守る民衆の姿が浮き彫りにされている。県内においても、東法田楯（最上町）、北郷楯・矢越田楯・二藤袋楯（いずれも尾花沢市。最北地域の城郭については、保角里志氏・関淳一氏らのご教示を得ている。）、十八才楯をはじめとする月布川沿いの小規模な楯（大江町。横山勝栄氏の指摘）、などをはじめとする小規模な楯がそれに相当することが指摘されている。領主的階層によって描かれた軍事物は、民衆の動向にはさほどの興味を有していなかったのであろう。八沼城主幾志美作守が最上義光に反旗を翻したため、最上氏によって攻められた際、「近辺ノ土民等爰カシコニコソリ居テ、落武者逃サシト追カケ追詰、切殺突殺シ、武具を剥トリ馬ヲ奪ヒ、惣シテハ沼ノ討死四百八十七人也」とあって（同「八沼落城ノ事」、落ち武者狩りを行う農民の姿も、そのたくましさの一端か。

2　領国毎の特徴

次に、領主たちの領国経営と防衛について簡単にふれてみたい。

①　置賜　伊達氏

伊達氏は、拠城を稙宗の時に梁川城（福島県梁川町）から桑折西山城（同県桑折町）に移し、さらに晴宗の時に桑折西山城から米沢城に移す。政宗が父輝宗から家督を相続した天正12年（1584）段階では、伊達領国は置賜・伊達・信夫・伊具・刈田の各郡域内であり、伊達郡梁川城・信夫郡大森城・刈田郡白石城・伊具郡角田城などが中心的支城であった。それに柴田郡・亘理郡・安達郡・田村郡・会津諸郡などが加えられていく。伊達氏は、天文の乱・元亀の乱などの内紛を経て、輝宗・政宗の代には伊達権力の中枢に伊達・信夫両郡の影響を完全に払拭して置賜出身者がすわる。しかも伊達宗家に権力が集中する求心的構造になっていた。この構造が城郭の配置にも当然反映していく。

さて米沢城は平城であり、防衛のために周囲に支城が配置されている。鷺城・三沢館・笹野館・戸塚山館・長手館・小松城などがそれであろう。また輝宗の隠居所として築いたのが館山城である。館山城の大掘切は、深さ20メートル・幅約30メートルにもおよび、鉄砲を意識した施設であることが良く理解されよう（伊達氏時代の拠城は、米沢城ではなく、この館山館や館山平城の方であるという考え方も根強い。）米沢時代になると、帯曲輪の多様さ、掘切・土塁を主要防衛施設とし、しかも掘切の発達と並行して、畝状に横堀群を築くところなどに特色が見られるようになる（手塚孝氏の指摘）。

②　最上・村山　最上氏

最上氏は、斯波兼頼が14世紀半ばに羽州管領として山形に入部し、最上氏を名乗るところからはじまる。最初、他の管領・大規模国人領主と同様、分郡支配を展開するとともに、一族庶子を山形内陸部に配置させていく。戦国期に入ると、永正・元亀・天正の各乱にみるように、一族争いを克服して最上宗家に権力を集中していく。続いて天正12年（1584）の天童合戦にみるように、競合する国人領主連合および個々の国人領主（寒河江大江氏、白鳥氏など。大江氏・白

鳥氏の城郭については、北畠教爾氏・鈴木勲氏・鈴木聖雄氏・大宮富善氏らのご教示をえている。）を打倒して、最上郡・村山郡全体に領地を拡大し、さらに庄内まで触手を伸ばしていった。

戦国大名最上氏の領国防衛体制の特徴は、平城である山形城を防御する支城を本城の周辺に配置している点、さらに他の大名にもあてはまることではあるが、領国境に拠点となる境目の城を設置して、その周囲に小規模城郭を配置して防衛する構造を作りあげている点、そして築城技術の特色として、掘と畝状堅掘（地域は限定されるが）を中核とした防衛網を形成している点（誉田慶信氏・長沢正機氏らの指摘）などを指摘しよう。

③　庄内　大宝寺武藤氏

武藤氏は、居城をはじめは赤川岸の大宝寺城（鶴岡市）に据えていたが、砂越氏などから攻撃されて炎上することなどがあって、武藤晴時の代に尾浦城（鶴岡市）に移す。この尾浦城は、上杉氏が、庄内を支配した際にも拠城とされた。尾浦城は、居城の部分と山城の部分が有機的に結合されておらず、この構造は、北越の色部氏の拠城、平林城と類似している。武藤氏領国内の城郭では、方形館・平城が多いこと（最上川以南では特に）、さらに海運・海路に対する備えとして築造された城郭が存在する。（酒井英一氏の指摘）。

武藤領国でも最上川を境にした南北ではかなり様相が異なり、川北の領主である東禅寺氏・砂越氏・池田氏・磐井出安部氏・来次氏・新田目留守氏は独立性が強く、各々の拠城である東禅寺城（亀ヶ崎城・酒田市）・砂越城（平田町）・朝日山城（酒田市）・磐井出楯（平田町）・観音寺城（八幡町）・新田目城（酒田市）も平城・山城と各特色を持つ（佐藤禎宏氏・小松良博氏らの指摘）。川北衆とでもいうべき状況である。川南にも土佐林氏のような有力国人がおり、大宝寺武藤氏の権力は、自立性の高い国人領主およびその連合の上に存在していたといえよう。

以上3地域の戦国大名の城郭について、その特色の一端をみてみたが、これは、各戦国大名の独自の支配体制・権力構造のありかたを反映していると、とらえることができよう。

3　祈りと城郭、海、河の見える城郭

ここでは、2でふれた各領国内の城郭のない、祈りと城郭、ついで海・河の見える城下についてふれてみる。

(1)　祈りと城郭

山岳寺院や山岳修験の場が中世城郭と重複することは夙に指摘されている。聖地を取り込む事例としては、成沢城（山形市）・延沢城（尾花沢市）など多数みうけられる。また寺院そのものを城郭の構成要素の一つに据えたものとしては、生石延命寺（酒田市）・岩波石行寺（山形市）などがあげられよう。顕密体制の社会の中にあって、ゲバルトによってだけでなく呪術性による防衛能力を増大させることや、民衆を「心の世界」から押さえるという大きな効力があったに違いなかろう。これは限定された小範囲の聖域論だけにとどまらないのではなかろうか。南北朝期に南朝勢力の拠点になっていた藤島城（藤島町）・立谷沢城（立川町）などは、羽黒山の近くに位置することに注目したい。これは羽黒山の衆徒・修験と連携し、彼らのもつゲバルトや情報収集能力に依存しただけであるという見方もあろうが、出羽三山という大きな山岳信仰・聖域の中に位置し、その聖域性によって南朝勢力の威信を一層高めようとしているようにもみえる。中世人の心象をぬきにしては中世城郭も語ることができないということを再確認しておきたい。

(2)　海・河の見える城郭

まず海にのぞむ城郭として庄内の十二山館・由良館・館山館（いずれも鶴岡市）が上げられる。いずれも湊・大津・浦などを押さえ、日本海海運を掌握するために築造された城郭である。

次に河をのぞむ城郭として、内陸では左沢楯山城（大江町）・本楯（寒河江市）・長瀞本楯（東根市）・二階堂屋敷（天童市）・川前館（大石田町）・鷹巣館（同）・名木沢館（尾花沢市）・清水城（大蔵村）、庄内においては砂越城平田町・東禅寺城・藤島

城（藤島町）・横山城（三川町）・大楯館（遊佐町）などがあげられよう。左沢楯山城は、数年にわたって調査・発掘中で、大きな成果をもたらしている。いずれも最上川・赤川・月光川などの海岸や舟運を押さえるために築造された城郭といえよう。中世初期の豪族の居館は水上交通のセンターであるという指摘があるが（網野善彦氏）、流通機構の掌握のみならず、いざというときに船で退避するルートにもなっていたことが、築城の背景にあろう。

おわりに・・・

以上1・2・3とみてきたが、天正18年（1590）小田原の後北条氏が滅んだ後、秀吉によって奥羽仕置が実施される。南部信直の場合、秀吉は、家中の者どもの城々をことごとく破却し、妻子を南部信直の拠城三戸に集住させよ、しかも信直の妻子については在京することを命じている（南部家文書、天正18年7月27日、秀吉朱印条書）。これは奥羽における大名。国人のありかたを典型的に示すものであり、奥羽の大名・国人領において破城が実施されたのである。大宝寺武藤氏領内の七日台楯（鶴岡市）・藤澤楯（同）・石堂山楯（同）などは、主郭を浅い掘を畝状に入れて破却し（秋保良氏の指摘）、最上氏領内の次年子楯（大石田町）では、道路からよく見える主郭の隅を破却している（川崎利夫氏・山口博之氏らの指摘）。

しかしながら、元和8年（1622）最上氏が改易になったとき、最上義俊が接収された城は21城におよび、破却をまぬがれていた城郭も多く、しかも一度破却された後、再び修復されて使用された城郭もあったようで、一国破城は現実的には不徹底であったとされている（小林清治氏の指摘）。中世城郭の命脈が、この奥羽仕置の段階ですべて終わったわけではないのである。

最後に今後の課題をあげておきたい。

①調査・研究者の増加によって、研究のすそ野を広げること。それによって、新しい城郭の発見も期待できよう。

②また発掘の事例を増やすことによって、正確なデータを蓄積し、編年・類型論などを可能にしていくこと。

③土地に刻まれた文化遺産として保存・整備をはかり、学校教育の地域教材として、さらに生涯教育の場として、活用していくこと。これらのことがあげられよう。

うきたむ風土記の丘考古資料館による今回の企画展およびシンポジュームによって、一層中世城郭に対する興味や関心が強まり、調査・研究も進展することを願ってやまない。

第10回企画展図録

発掘された山形の城館跡

2001年10月1日　発行

編　集　　山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

発行所　　山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
〒992-0302　山形県東置賜郡高畠町大字安久津2117
TEL（0238）５２-２５８５
FAX（0238）５２-４６６５

印　刷　　有限会社　寄清堂印刷

R100 この広報誌は古紙配合率100％の再生紙を使用しています。